

記 入 日 2018 年 1 月 15 日

1. 概 要

実践団体名	四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会		
連絡先	会長 十河陽之助 事務局 花崎哲司 電話 070-5514-3755		
プランタイトル	「みんな集まれ この指とまれ 防災の輪っ!!」		
プランの対象者※1	18 全ての人々	対象とする 災害種別※2	7 災害全般

※1 別紙「記入上の留意点」の1. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※2 別紙「記入上の留意点」の2. 項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント!】

2014 2015 年度「災害弱者と言わせない! 香川県立盲学校のチャレンジ」の成果を、障害者だけでなく「生涯学習」に位置づけて一般化。高齢化が進む地方都市全体のハザードに対するレジリエンス向上に応用展開できるのではないかという、社会実験を含む取り組みである。住民の防災意識と対応能力を高めることで、行政の負担軽減にもつながると期待される。

【プランの概要】

大学や研究者、行政、青年会議所や自治会、各種企業、一般の県民など幅広いジャンルが有機的に結合したコンソーシアムとして、以下の6つのWGを展開している。

- ①インバウンドのゲスト、在留外国人向け防災教育の推進
- ②急増する高層マンションにおける防災対策 普段の備えと「避難しない避難」という選択肢
- ③アウトドアブームを受けた動き 防災視点の「歩き遍路」体験・軽ワゴンキャンピングカー
- ④女性目線での遍路小屋の整備 空き家活用・地域活性化・災害時シェルター転用に期待
- ⑤防災フェス in サンポート高松 民間主導、だれもが楽しく学べるオープンなイベント開催
- ⑥高齢者の防災 高齢者自ら命をつなぐためにできること やるべきこと

【期待される効果・ここがおすすめ!】

- ①香川県民の多くに「香川に大きな自然災害はない」という思い込みがある。1200年続く四国遍路に根付いた「自然災害から身を守る方法」「困った時の助け合い」などの知恵や精神文化を現代防災に生かすことにより、地域性の高いオリジナルな自助・共助システムが構築される。
- ②「災害弱者」という固定観念で扱われてきた盲学校の防災教育の成果を、高齢化・国際化が進む地方都市に「生涯学習」として応用発展、バリアフリーな防災社会の構築が図られる。
- ③地域社会全体の防災力向上により、行政の負担軽減が図られる。



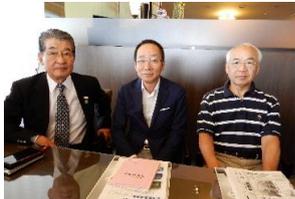
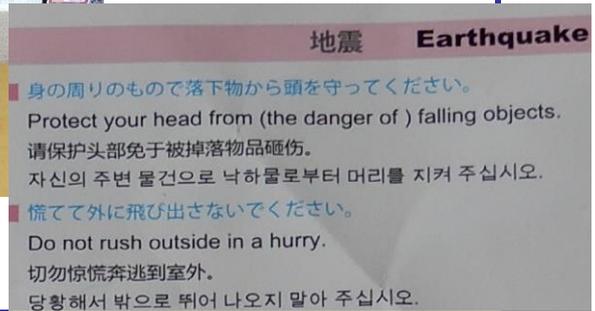
2. プランの年間活動記録 (2017 年)

表内の①～⑥は、前頁「プランの概要」の中のWG①～⑥のいずれに係るかを示す

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
5月	役員会 コンソーシアムとしての研究体制と内容確認 (香川大学危機管理研究セ) 青年会議所 香川県 高松市 企業 自治会 メディア等との連携体制を確認 香川大学工学 教育 生涯学習 男女共同参画 インターナショナル等部局との連携		
6月	①行政や業界と、観光及び労働目的の外国人向け防災を協議	①香川県観光協会会長・外国人多数雇用8店舗コンビニオーナーと研究協力協定	①ホテル旅館業の館内案内パンフ収集、危機管理に係る部分対応言語の調べ ①コンビニの外国人労働者実態調査
7月	②マンション防災自治会で防災の仕組みづくりを提案	②マンション防災410戸 一級建築士による簡易耐震診断 ・学習会の開催(継続) ・管理組合と連携	⑥高松市社会福祉協議会の依頼講演 高齢者教室 高齢化率50%超え漁村
8月		②事前に自治会・管理組合と施設設備点検、互いの役割分担を確認 ④スペイン巡礼の調査	②マンション防災 ・防災探検隊「避難しない避難」 ・夜間防災訓練
9月	③歩き遍路企画	③歩き遍路募集 下見 巡検の視点確認 配布教材作成	④スペイン「アルベルゲ」日本版の開設目指し、「女性遍路小屋(兼シェルター)」空き物件の現地検証
10月		防災フェス 危機管理及び観光行政、NTT、協賛協力企業と連絡調整	③歩き遍路体験 道の駅源平の里むれ～86 番札所志度寺
11月	②災害用備品購入自治会・管理組合	②自治会で餅つき計画 防災メモ付け配布計画	⑥高松市社協傘下支所 民生委員・福祉委員らに講演 ①～⑥防災フェス in サポート高松
12月			②マンション防災 正月餅を各戸手渡し、普段困難な各戸の実態把握に。 ①外国人旅行者アンケート調査
1～3月	次年度研究推進のための反省と検証 とりまとめ資料の作成と配布		

3. 実践したプランの内容と成果

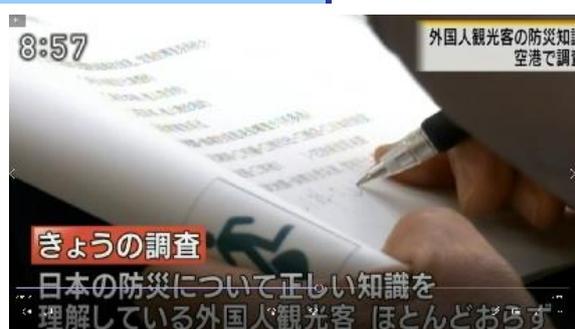
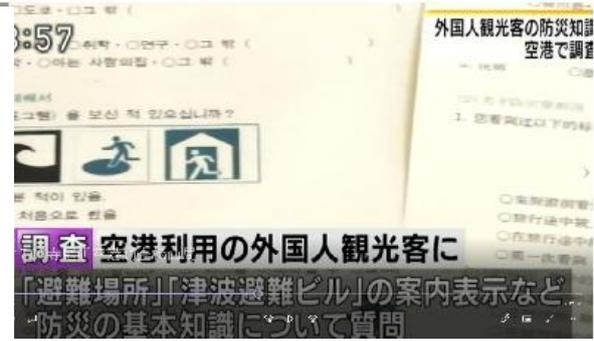
【実践プログラム番号： ①-1-1 】 ※3

タイトル	WG①インバウンドのゲスト、在留外国人向け防災教育の推進
実施月日（曜日）	2017. 6 事前調査 2017. 2. 19
実施場所	ホテル花樹海（香川県高松市） 事前調査 成田・羽田空港
担当者または講師	担当：香川大学危機管理先端教育研究センター副センター長 氏名：特命教授 岩原廣彦（「花樹海」観光協会連携担当） 担当：四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会事務局 氏名：花崎哲司（成田・羽田事前調査担当）
所要時間または「コマ数×単位時間」	事前調査 成田・羽田各2時間 「花樹海」2時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 2
活動目的※5	3
達成目標	観光業界の従業員・旅行者への防災教育や情報提供の現状把握 英中韓以外の多言語化したパンフの提供等、連携体制の構築
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	<p>香川県観光協会会長 三矢昌洋氏 高松ホテル旅館料理協同組合・香川県ホテル旅館生活衛生同業組合事務局長 和田憲明氏との情報交換と協議 2時間</p>  <p>左から 香川県観光協会会長 三矢昌洋氏 香川大学特命教授 岩原廣彦氏 ホテル旅館業事務局長 和田憲明氏</p> <p>①香川県のインバウンドの現状の聴き取り （高松空港のハブ空港化 LCC 乗り入れによる変化 国籍 言語圏 等） インバウンド多国籍化と「防災・安全」に係る宿泊施設の情報提供の現状について観光協会やホテル旅館業としての認識と現状。</p> <p>②宿泊施設の災害対応の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・従業員教育→火災対応訓練は充実、他のハザードにはほぼ未対応 ・ホテル旅館生活衛生同業組合作成のガイド（客室配置の紙媒体） ・「H花樹海」独自に作成した非常時のインフォメーション  <p>宇多津国際ホテル 和室の備品 左端が安全関係のパンフ</p>  <p>地震 Earthquake</p> <p>身の周りのもので落下物から頭を守ってください。 Protect your head from (the danger of) falling objects. 请保护头部免于被掉落物品砸伤。 자신의 주변 물건으로 낙하물로부터 머리를 지켜 주십시오.</p> <p>慌てて外に飛び出さないでください。 Do not rush outside in a hurry. 切勿惊慌奔逃到室外。 당황해서 밖으로 뛰어나오지 마십시오.</p>

英中韓以外の言語圏
文字が理解できない人 LCC の発達で来日する人の所得層が変化か

③香川大学教育学部 寺尾徹研究室が、2月に事前調査として実施した高松空港における LCC 利用で帰国前の旅行者向けアンケートによると、ゲストには防災の知識やピクトグラムがほとんど理解されていないことが分かった。

(NHK 高松・松山から四国地域に既報 2017. 2. 19)



④成田空港及び羽田空港における災害時インフォメーションの現状調査の報告 2017. 2. 19 高松空港と同時進行で実施(事務局 花崎) 空港ビル会社による案内係員

非常時の詳しい対応の仕方については、空港ビル広報を通さないと答えられない。

案内放送は英中韓以外は想定していない。

羽田空港では地震発生時、放送等が聞こえない場合は、出発ロビー以上のフロアに誘導案内するよう決められている。

年数回の防災訓練への参加をしている。

成田空港 個人的な感想として 東日本大震災の時にはかなりの混乱があり、お客様を屋外の第一駐車場に誘導するのがやっとだったという案内所スタッフの声。

航空各社

カウンター (ベトナム航空)

発着の曜日の時間帯にはカウンターに母国語が話せる係員を配置しているが、そうでない時には対応は困難である。

出発前の客室乗務員 (国内大手航空会社)

ボーディング後は駐機場にあっても機長の指示による。

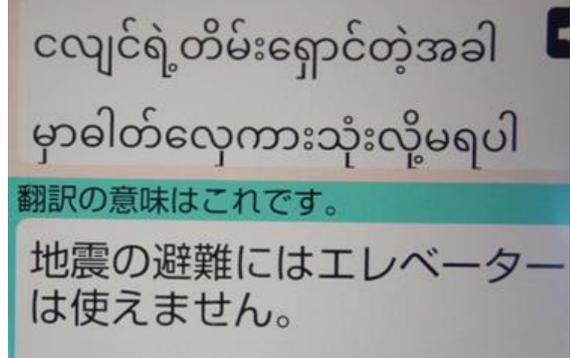
搭乗前については、防災センターまたは各社ディスパッチ等の指示に従うことになっている。

秋入社の手航空会社社員

特段に防災教育を受けた記憶がない。(2月調査時まで)

商業施設・テナント(羽田空港)



	<p>年一度空港ビルが実施する防災訓練に、任意で最低一名程度の参加を求められている。</p> <p>警備会社 成田空港 SECOM 防災センターの指示による 羽田空港 防災センターの指示によるが、警備員一人一人に赤色の小冊子が配布され、緊急時の対応が確認できるようになっている。案内誘導用のメガホンが、手近なところに用意されている。</p> <p>警察 警視庁・千葉県警 個人の見解は述べられない決まり回答できない</p> <p>以上、大多数の場面において</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防災センターの指示待ち ・英中韓以外の言語対応がほとんど無い 以上の現状を報告した。 <p>⑤「安心・安全」な旅を提供するために、外国人に必要な情報と提供方法についての質疑</p> <p>⑥(公社)日本観光振興協会が発行する案内対訳マニュアル本の提供を受ける</p> <p>⑦研究協力体制の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後、ネパール・インドネシア・ベトナム・フランス・ドイツの言語化した防災パンフレットを作成し、試験的に宿泊施設においてもらう。 ・停電時に光る「ガイドロープ」の実用性を考えてもらう。 <div data-bbox="555 1048 1388 1429" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  <p>Voice Tra による ミャンマー語訳</p> <p>チェックイン時に フロントで提供できるリーフレット 作成に向けて</p> </div>
<p>準備、使用したもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人材 ・道具、材料等 	<ul style="list-style-type: none"> ・羽田・成田で実施した防災関係を含むピクトグラム表示調査資料 ・聞き取り調査時の録音音声(各エアライン・警備会社・案内所) ・2月に香川大学教育学部寺尾研究室が実施した高松空港における出国前のゲスト向けアンケートの結果資料 ・香川県立盲学校で実践した「蓄光ロープ(暗闇で自発光)」「ガイドロープ」(デモンストレーション)
<p>参加人数</p>	<p>対象 三矢会長 和田事務局長 ホテル花樹海従業員 本研究会 特別研究顧問 岩原廣彦 教授 事務局 花崎哲司</p>
<p>経費の総額・内訳概要</p>	<p>なし</p>
<p>成果と課題</p>	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人旅行者の国籍や言語の多様化が進んでいることとともに、旅行業界では「旅の安全」を担保するためのインフォメーションが必ずしも進んでおらず、十分とは言えないことが分かった。 ・従業員への教育体制について。「火災」に係る部分は「消防法」によって訓練の実施や避難誘導體制の確立、設備の整備が厳格に規定されているのに対し、「地震・津波」についてはほぼ無策であ



ることが分かった。

【課題】

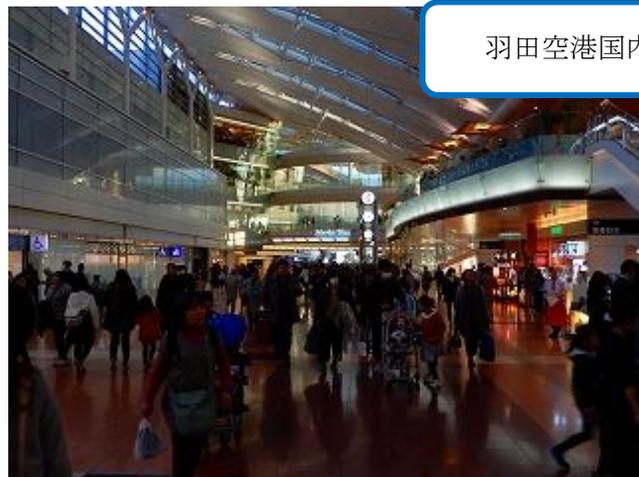
- ・外国からのゲストが急増する中で、災害に対峙するときの「ことばの壁」を乗り越えるための方策の検討が急務である。
- ・大規模災害の発災時、多数の回答が「防災センターの指示による」というもので、情報伝達や指揮命令系統が混乱した場合のための現場の柔軟な対応能力向上が課題である。



羽田空港 空港ビル会社職員による information



警備会社の防災マニュアル



羽田空港国内線



ックに陥ったら何ができるだろうか



成田空港

最新の警備体制だが

成田空港 国際線最大の受け入れ口
英中韓以外は対応困難な information



JR成田空港駅 NEXホーム
見たこともないピクトグラムも

成果物

次年度に向けて継続研究
・本年度の防災案内ガイドの試作品については、年度末に向けて各宿泊施設に提供と検証予定。

【実践プログラム番号：①-1-2】※3

タイトル	WG①インバウンドのゲスト、在留外国人向け防災教育の推進
実施月日（曜日）	平成29年12月10日
実施場所	国特別名勝 栗林公園 (大学院生と香川県技術士会による研究調査)
担当者または講師	担当者・講師等の区分：WGリーダー 氏 名：岩原廣彦 特命教授 所属・役職：香川大学危機管理先端教育研究センター副センター長
所要時間または「コマ数×単位時間」	10時30分～打合せ 11時～13時(2時間) 調査活動
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 2
活動目的※5	2
達成目標	観光業界と防災の関連付けが図られる
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	<p>平成29年度 四国防災・危機管理特別プログラム 実務演習レポートについて</p> <p>1. テーマ 「香川県の観光業におけるインバウンド向け防災ツールの作成」</p> <p>調査風景 フランスからのゲスト JAPAN RAIL PASS 利用</p>   <p>マカオからのゲスト LCC航空機利用</p> <p>2 概要 (1) 目的</p> <p>瀬戸内芸術祭など香川県を訪れる外国人旅行者は年々増加している。これら外国人旅行者の宿泊施設である旅館やホテルな</p> 

どには火災が発生した場合に宿泊客を安全に誘導するため、館内図や館内放送など様々な方法がとられている。それらの文字情報も英語・中国語・韓国語などで表記されている。

一方で、地震時など突発型災害時にどのように対応すれば良いのかといったツール、例えば、館内での避難誘導や館内放送や、町歩き用の観光案内図にも突発型災害発生時に何処に避難すればよいのかといった内容は示されていないのが現状である。

インバウンドが増加する香川県において、香川県の観光業に特化した外国人観光客向けの突発型災害時用ガイドツールの開発を目指す。

(2) 実施内容

①香川県を訪れる外国人の属性分析

- ・どの国からの訪日が多いか
- ・季節的な変動は
- ・年齢層及び性別
- ・目的（香川県内の何処を訪れるか）

②外国人旅行者（若しくは留学生）を対象とした、アンケートを作成

アンケートの対象は、団体観光客は除く（団体観光客は、専用ガイドがつくため団体行動をとる。言葉の壁もない）

○アンケート項目(案)

- ・どの国からの来訪か、年齢、性別、訪日目的
- ・地震が発生したとき何が不安か
(困ること：項目から選択)
- ・災害時または事前の備えとして求める情報
- ・伝達手段
- ・避難のタイミングタイミング など

③当該アンケート調査を実施（香川県内の観光地）

④宿泊施設へのヒアリング調査（旅館・ホテル）

⑤アンケート結果等をもとに、外国人観光客向けに防災情報を伝える手段（館内誘導や備蓄に関する情報表示、観光マップに防災避難所・方法などを標記他）を検討

⑥作成した観光マップに対する外国人旅行者の評価

(3) 実施方針

- ・危機管理プログラム卒業生（1期生）及び(公財)高松観光コンベンション・ビューロー、高松空港ビル、香川県観光協会

	などの協力を得て、アンケート調査を実施
準備、使用したもの ・ 人材 ・ 道具、材料等	香川県観光協会、栗林公園管理事務所担当副主幹との打ち合わせ 取材に入るNHK記者との打ち合わせ アンケートの作成 学生及びスタッフが着用するビブス アンケート実施溶離クリップボード&筆記用具 アンケート用紙 翻訳ソフト「Voice Tra」
参加人数	スタッフ 約10名
経費の総額・内訳概要	事務用品費 3000円 アンケ作成費用 2000円 計5000円
成果と課題	【成果】
<div style="text-align: center;"> <p>アンケート調査結果について</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実施日 平成29年12月10日（日） ・ 実施場所 栗林公園正面入口及び栗林庵前出口 ・ 回答者概要 <ul style="list-style-type: none"> (1) 外国人 36名 <ul style="list-style-type: none"> ① 中国語利用者 22名（中国・台湾・香港など） ② 韓国語利用者 3名 ③ 英語利用者 11名（フランス・シンガポール・マカオなど） (2) 日本人 27名 合計 63名 ・ アンケート結果（抜粋） <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>(1) 過去に地震の経験がありますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ある 38.9% ・ ない 61.1% <p>(参考) 日本人 ある 85.2% ない 14.8%</p> </div> <div style="width: 45%; text-align: center;"> <p>過去に地震の経験がある (外国人)</p>  </div> </div> <p>→ 地震を経験したことのない方が半数以上。南海トラフ地震のような大規模地震ではなく比較的な小規模な地震であっても、不安等を感じるのではないか。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>(2) 地震発生後も観光を続けますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 絶対に続ける 3.4%（日本人の場合 0.0%） ・ 安全が確認できれば続ける 37.9%（日本人の場合 44.0%） ・ 中止する 17.2%（日本人の場合 12.0%） ・ すぐに帰国する 31.0%（日本人の場合 36.0%） ・ 分からない 10.3%（日本人の場合 8.0%） </div> <div style="width: 45%; text-align: center;"> <p>地震後も観光を続けるか(外国人)</p>  </div> </div> <p>→ 安全を確認できれば観光を続けたいとの希望が多かった。地震後、安全についての状況を伝えることができれば、観光を継続できるのではないか。</p> 	

ピクトグラム理解度の国内外差

(3) 避難標識の理解度



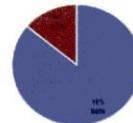
- ① 避難所標識 正答率57.1% (日本人の場合 80.0%)
- ② 津波・高潮標識 正答率78.6% (日本人の場合 76.0%)
- ③ 津波避難場所標識 正答率46.4% (日本人の場合 64.0%)
- ④ 津波避難ビル標識 正答率60.7% (日本人の場合 92.0%)

→ 日本人に比べると理解度は低かった。

(4) 地震に関するパンフレットが必要だと思いませんか？

- ・ Yes 86.1% (日本人の場合 73.1%)
- ・ No 13.9% (日本人の場合 26.9%)

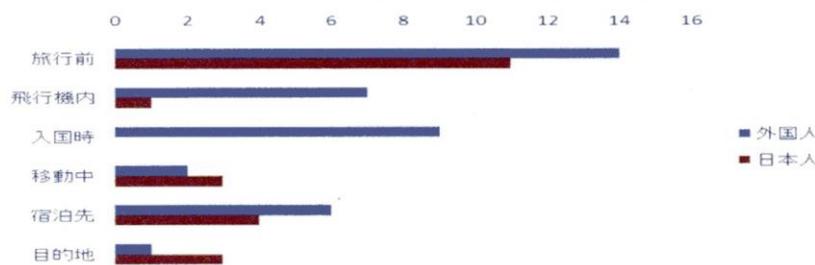
地震に関するパンフレットの必要性



→ パンフレットの需要が比較的あった。

(5) どんなタイミングでパンフレットを入手するのが望ましいと思いませんか？

パンフレット入手のタイミング



→ 旅行前・飛行機・入国時など、事前に知っておきたいという傾向があった。

2月に実施した高松空港での調査は、韓国・中国中心だったが、今回は香港・マカオ・シンガポールなど英語圏のゲストが対象の多くを占めた。正答率に国籍による差が認められた。国ごとの災害特性や、災害に係る報道、ニュースへの関心や、学校教育制度の影響によるものと推測する。

※参考：各項目年齢別回答状況

外国人回答者		20代(5名)	30代(10名)	40代(4名)	50代(10名)	60代(5名)
(2)観光を続けるか	絶対続ける	0	0	0	1	0
	安全なら続ける	3	4	1	2	1
	中止する	1	2	0	1	1
	すぐ帰国する	1	2	1	3	2
	分からない	0	2	0	1	0
(4)パンフが必要か	YES	4	9	4	8	4
	NO	1	1	0	2	1
(5)必要なタイミング	旅行前	1	2	1	7	2
	飛行機内	1	1	3	2	0
	入国時	4	3	0	1	1
	移動中	1	0	0	1	0
	宿泊先	0	3	0	2	1
	目的地	0	0	0	1	0

日本人回答者		20代(9名)	30代(4名)	40代(6名)	50代(1名)	60代(7名)
(2)観光を続けるか	絶対続ける	0	0	0	0	0
	安全なら続ける	3	2	4	0	2
	中止する	2	1	2	1	3
	すぐ帰国する	3	0	0	0	0
	分からない	1	0	0	0	1
(4)パンフが必要か	YES	7	3	4	1	4
	NO	2	1	2	0	2
(5)必要なタイミング	旅行前	5	1	2	1	2
	飛行機内	0	0	0	0	1
	入国時	0	0	0	0	0
	移動中	1	1	1	0	0
	宿泊先	1	1	2	0	0
	目的地	0	1	1	0	1

【課題】

・インバウンドのゲストに聞き取り調査をしたところでは、紙媒体よりはWi-Fi環境下で、自分で色々な情報収集をする頻度の方が高くなっていることから、本調査の成果を紙媒体だけでなく、IT機器に情報提供できる仕組みづくりが急がれることが分かった。

・アンケート以外に聞き取りをしたところでは、母国において災害時の情報収集の方法は？という問いに対して、「ラジオ」と答えた者が多かった。PCやタブレット端末などが多いと予想したが、特に欧州でラジオという意外な結論を得た。コミュニティFM、あるいは観光専用の小出力のFM放送局の開設も、情報提供には有効かもしれない。

成果物

- ・アンケート結果は成果物集において別途報告
- ・香川県観光協会等関係団体には成果物集配布をする

【実践プログラム番号： ①-2】※3

タイトル	WG①インバウンドのゲスト、在留外国人向け防災教育の推進 (英中韓以外の言語圏メイン)
実施月日(曜日)	2017. 6
実施場所	ローソン浜ノ町東店
担当者または講師	担当：事務局 氏名：花崎哲司
所要時間または 「コマ数×単位時間」	(有)ピアチェ 代表取締役 松下 清氏との協議 2時間
プログラムの カテゴリ、形式※4	1 2
活動目的※5	9
達成目標	多様化する外国人労働者の国籍や言語に対して、より分かりやすく災害時の対応行動に役立つ資料を提供する。 (ネパール、ベトナム等アジア諸国に視点を置く)
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	<p>1 オーナーとの打ち合わせ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・店舗内の写真撮影は、FC契約上難しい。商品の陳列は、すべて本部からのマニュアル通りになっていて、部外秘である。 ・ネパールでは第二外国語として英語を習ったり、来日してから日本語学校に通ったりした人もいて、あながちネパール語だけしか理解できない人ばかりではない。 ・研究の対象とする店舗はネパール語に加えて、若干英語が通じる従業員も勤務している。店長以外、すべてネパール人。 ・従業員に対して格別に「防災」や「安全」に関する教育はしていない。  <p>2 店長・店員との打ち合わせ・ バックヤードの事務室内掲示物を確認させてもらう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本部から送付された各種掲示物は日本語表記のみである。 ・従業員の「マダン(リーダー)」ネパール 「カトリ(サブリーダー)」ネパール 他 ・店員同士の日常会話はネパール語でコミュニケーション ・販促用日本語の掲示物が上下反対になっていることもある。 「日本語、漢字、むずかしいね。」 ・接客の一般的な日本語は理解できているが、マニュアル以外の質問になると会話が困難になる。 ・英語を交えれば会話がスムーズになることもある。 ・ネパールでは地震の経験は結構あるが、対応は習っていない。 <p>3 「消火器の使い方」の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「google 翻訳」or「Voice Tra」を用いてネパール語・英語・日本語表記の試作品を読んでもらい、理解できるかコメントをもらう。

以下にネパール語 ver. 試作品 スニタさん(F)への聞き取り調査

आगो बुझानेवाला कसरी प्रयोग गर्ने	
消火器の使い方	How to use fire extinguisher
आगोको स्थानमा ल्याउनुहोस्	
火事のところに持っていく	Take it to the fire
अग्निमा नजल प्वाइन्ट गर्नुहोस्	
ノズルを火に向ける	Point the nozzle at the fire
पहेलो पिन निकाल्नुहोस्	
黄色いピンを抜く	Pull out the yellow pin



- 4 改訂版の作成
より理解しやすい標記に改める。
- 5 店舗内に掲示し、発災時に向けて従業員に共通理解を図ってもらう。

準備、使用したもの

- ・人材
- ・道具、材料等

- ・被験者となる在留外国人労働者を雇用する会社との連絡調整
- ・翻訳ソフトの用意
- ・試作品の作成
- ・母国語として理解できるか、理解しやすいかなどの調査

参加人数

当該店舗のネパール人従業員 6名 オーナー 店長 計7名

経費の総額・内訳概要

教材作成費(カラーコピー等) 1000円

成果と課題

- 【成果】
- ・津波浸水域のコンビニのオーナー・店長・従業員の防災意識と知識が高まった。この店の場合、店長だけ日本人。あとはネパールからの研修生だけで接客をしている。片言英語会話は可能。
- 【課題】
- ・日本語の中の「熟語」を外国語に置き換える場合、対象国によってとらえ方や感じ方が大きく異なること。
 - ・ベトナム、バングラディッシュ、インドなど多様化する労働者の国籍や言語に、今後の対応を進めたい。

成果物

- ・「消火器の使い方」汎用版の配布 当該店舗とチェーン店

【実践プログラム番号：② _____】※3

タイトル	WG②急増する高層マンションにおける防災対策
実施月日（曜日）	平成28年度夏以降 随時
実施場所	イトーピア高松（香川県高松市浜ノ町60番55）
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：花崎哲司 所属・役職等：香川県立盲学校 日本安全教育学会
所要時間または「コマ数×単位時間」	研修会 1時間を基本に 役員会では30分程度 月1回
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 6
活動目的※5	3
達成目標	マンション防災 普段の備えと、「避難しない避難」という選択肢
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	 <p>チャレンジプラン2014～2015年度、香川県立盲学校が取り組んだ「ミニ防災拠点」「避難しない避難」理論のマンションへの応用 CERT（Community Emergency Response Team）の策定 浸水域・高齢化したマンション全体を一つの城に見立て、いざというときに「籠城（ろうじょう）」して助け合える仕組みを作ろうとしている。</p> <p>「避難しない避難」につなげるために必要なアクション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・想定被害の確認 ハザードマップの再確認 ・マンションの現況と悩みや問題の洗い出し 築40年、海岸部のリゾートマンション 410戸 高齢化 近隣にマンションが乱立 液状化危険度A 津波高3m 震度6強 避難所整備の大幅な遅れ これまで災害への不安を感じてはいたが、誰も動き出せなかった。 ・知識の蓄積

周辺の災害史 地域特性の把握 街歩き探検隊 マンション探検隊
エレベータ閉じ込め時の対応とかご内の非常用備蓄品の確認
マンション防災に関する勉強会を毎月開催・住民に公開

- ・建物の安全性の担保
RC建築…一級建築士による簡易耐震診断の結果
杭は支持層に達す 状態は概ね良好 居住階被害は軽微と想定
□に配置された4棟のエキスパンションがやや狭い
自転車置き場と集会室の部分の強度がやや不安
- ・避難が現実的に可能か検討
避難所まで直線でも600m、15階以上のマンション群と木蜜地域が隣接、周辺人口8000戸超、キャパ1500人の避難所にはわずか700食の備蓄 体育館や教室に避難は高齢者に過酷過ぎる現実
- ・マンションに残るか、避難所に行くか
判断材料をどこに求めるか検討



行政のコメント 高松市危機管理課長
「避難所の初動には相当な困難が予想される。安全が確保され正しい知識に基づいていれば防災に強いまちづくりとして有難い。」

マンションから西方向は木蜜地域 東方向は沿岸
に高層マンション乱立 避難所キャパ、液状化
火災 高齢者は避難すること自体が極めて困難

7月5日 NHK
おはよう日本(全国)

放送後、全国20カ所のマンションから照会があった。

識者のコメント 香川大学危機管理先端教育研究センター副センター長 岩原廣彦特命教授

「臨機応変に状況判断、あらゆる選択肢から自分たちの命と生活を守るために住民自らが議論することに大変意義がある。地域のためにもなる。」

各戸に「避難しない避難」の検討の呼びかけ、
各戸には、家族の世代や日常的な生活を維持するための、実態に応じた10日分の「衣食住」の備えを呼びかけ
(行政がイメージしている備蓄物資と各戸の求めるものには必ず食い違いが生じるはず オリジナルな自分に合った備蓄を推進するよう要請)

自治会はワイヤレス大出力のスピーカー、水や食料、布担架などの備品、医療等人材バンクの作成などの取り組み
管理組合(ハード面の整備 ELV閉じ込め時の対応等)



どういう考え方、仕組み、進め方をするか話し合う住民たち
自治会と管理組合、双方でやるべきことの検討と、役割分担



学習



マンション探検隊 海の風景は最高だが、マンションの防災上の特性や実態を知ろう



エレベータは6基 10階までの途中で停止したら、長期戦の可能性も視野に備品を見直す



自治会役員だけでなく一般住民も学ぶ機会を 非常放送設備が聞こえやすくなる改善も検討



空きスペースを物資備蓄場所に転用を検討



屋上にあった水槽は地上に タンク下には蛇口が並んでいて、停電時も給水が可能



夜間防災訓練 茨城県提供の津波被害視聴



「防災の日を前に」というのがポイント



水消火器体験 子供から高齢者まで



布担架体験 意外に軽いわね これならば階段も○

27 地域

2017年(平成29年)8月6日(日曜日)

香川

エレベーター内の防災グッズなどを確認する住民たち(高松市で)

病院の美 医療機関

医療機関名

徳島大
徳島赤十字
県立中央
香川労災
香川大
三豊総合
高松市民
坂出市立

国・四国がん生
愛媛大
県立中央
済生会香治
松山赤十字

高知医療セ
高知大
「国・」は国立
センター。「一」

もみられます。
圧倒的に男性が多いが
で、当該でも約80歳代の
男性が大半です。生活習慣
が大きく影響していると
一般的です。
ただ、時間もかかり、患
者自身にも負担のかかる
難しい手術、腕にあけた
小さな穴からカメラやメ
ス。

ます。1年に1回は定期的
に人間ドックで内視鏡検査
を受けるなど、早期発見に
努めてください。
(聞き手) 濱股和也

つかないマレエレベーター
内に設置されている非常
用ボックスの開き方
などを確認した。マンシ
ョンを離れて避難する際
に、危険とされる箇所もみ
た。

副会長の花崎哲司さん
(59)は「避難所は機材不全
に、危険とされる箇所もみ
た。

高松市坂ノ町の海辺近く
にたつマンション「イト
ピア高松」で6日、敷地内
や周辺地域を見回る防災
勉強会が、住民を対象に開
かれた。

イトピア高松自治会に
よると、周辺にはマンシ
ョンなどの住宅が増えお
り、最寄りの避難所では取
容できない恐れがあるとい
う。自治会は、被災しても
マンションにたまりついでに生
活できる仕組みづくりを進
めている。

高松市坂ノ町の海辺近く
にたつマンション「イト
ピア高松」で6日、敷地内
や周辺地域を見回る防災
勉強会が、住民を対象に開
かれた。

イトピア高松自治会に
よると、周辺にはマンシ
ョンなどの住宅が増えお
り、最寄りの避難所では取
容できない恐れがあるとい
う。自治会は、被災しても
マンションにたまりついでに生
活できる仕組みづくりを進
めている。

香川中央2回戦へハンドボル
5日、山形、宮城、福島
3県で、ソフトボールや相
撲、ボート、テニス、重量
挙げのほか、少林拳法や
ハンドボール、ボクシング
が始まり、計8競技で熱戦
が展開された。

県勢は、ハンドボル
男子の香川中央が2回戦に
進んだが、女子の高松商は
1回戦で敗れた。

◇ハンドボル◇
香川中央 47
▽女子 27
▽男子 18

宇布や空に開くプロモ
デルを集めた企画展「宇
宙へ飛びたててパラモ
デル」が、高松市香南町の市香南
歴史民俗郷土館で開かれて
いる。

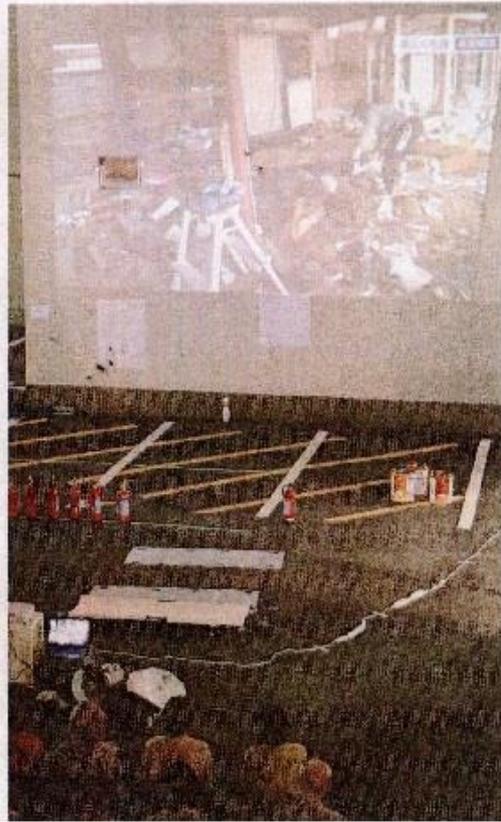
地元愛好家の「香川通空
会」が作った約100点を

夢と飛べプラモデル
高松 愛好家 ロケットなど120点

NHKは松山放送局扱いの四国地方向けニュースとして5回放送。「防災の日を前に、昨夜高松市のマンションで…」という扱い。

9月1日の「防災の日」の夕方のニュースは、防災関連ネタが被ることを意識して、あえて30日の夜に実施した。

休日の夜ということで、普段は訓練に参加しにくい小中学生や現役世代の参加も多くあった。



壁面に映し出す 津波の恐怖

防災の日（9月1日）を前に、高松市浜ノ町のマンション「イトーピア高松」で30日、住民たちがマンション壁面に東日本大震災の被災地の映像を投影し、災害の恐ろしさを実感する訓練を行った。

イトーピア高松自治会によると、大地震の際、海に近いマンション周辺は液状化が予想されるうえ、最寄りの避難所では住民を収容しきれないとい

津波で壊された民家の映像に見入る住民ら（高松市で）

高松のマンションで投影

う。このため、同会はほぼ月1回、防災をテーマに講演会を開き、住民それぞれが避難方法を考えるなどしている。

この日は、東日本大震災直後に茨城県北茨城市で撮影された様子がマンション壁面（縦6m、横10m）に投影された。津波で1階部分が失われた民家や、線路の上に流されてきた乗用車など、生々しい災害の爪痕に住民は息をのんだ。

その後、壁面に火災の映像を映し、住民たちは壁に向かって水消火器を使う訓練を行った。

自治会の花崎哲司副会長（59）は「県内は災害が少なく、市民の意識も低い。高齢化する地域の防災力を高めるため、まずは心構えをしてほしい」と話した。

2017.08.31 読売新聞

餅つき大会 大作戦



住
防

12月 毎年恒例の自治会の「餅つき大会」もちを各戸に届けるときに、普段付き合いの少ないお宅の居住状況や悩みがないか民生委員を中心に調べ。ふだんからの挨拶活動など、つながりを大切にする防災活動を展開 特に高齢者 一人住まい 子育て世代 外国人

自治会では、災害時の避難所への移動やそこでの過酷な生活を考えて、**電気・ガス・水道が止まっても、建物が大丈夫なら各戸にとどまる「避難しない避難」と各戸で10日分の衣食住の備えをお勧めしています。**
またご近所とはふだんから挨拶をしあって、何かあった時には助け合える関係を作っておけばよろしいですね。
備蓄品 缶詰 レトルト食品 水 アルファ米(ご飯) カセットガスストーブ 炭 日用生活用品など、各戸の「命をつなぐために必要なもの」を考えましょう。
「良しお牛もあてて下さい」

実際に配布したメッセージ



準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	人材 一級建築士(竹中土木) 簡易耐震診断 香川県技術士会 地元消防団員 参加者 マンション居住の皆さん 資材提供 アルファー食品(株) 高松北消防署(水消火器) 資料提供 茨城県(東北地方大震災の時の県内被害まとめ映像資料) 報道協力 NHK 山陽放送 読売新聞 毎日新聞
参加人数	自治会加盟 310戸に加えて、未加入戸へも自由参加を呼びかけ
経費の総額・内訳概要	教材・資料制作 3000円



成果と課題

【成果】

・これまで「防災」には関心があったが「きっかけ」がなくて動けていなかった住民に、主体的に考えて防災の仕組みづくりを進めようという意識が高まった。～不安を一つずつクリア～

- ①想定被害がマップでは理解できない わかりにくい
→防災街歩き マンション探検隊を実施しましょう
海が直近 凄惨な数の電柱とケーブル 狭小道路 木蜜を確認
マンションの強みと弱みを歩いて確認して回る取り組み
 - ②エレベータが管制運転で停まらず閉じ込めになった時が不安
→管理会社と連携 エレベータ内の非常用備品を確認
→閉じ込め時の緊急の救出講習を実施したい
→バッテリーで最寄り階まで動けるとも聞いたわよ
 - ③避難所は機能するのか
→みんなで高松市の備蓄状況を確認 全く頼りにならない
→各戸で「衣食住」10日分は備えるようにしよう
 - ④そもそもこの建物はどうなるのか、避難所は機能できるのか
→エキスパンションは壊れるためにあることの確認
消火栓の使い方 非常階段灯が設備されていないことを確認
非常放送のやり替えを決定 簡易耐震診断の実施
→避難所に避難する・しない…柔軟に考えられるようにしよう
 - ⑤耐震診断が高額過ぎて手が出せなかった
→一級建築士(竹中土木)、香川県技術士会のボランティアでクリア
 - ⑥マンション全体のことをよく知っておきたい
→自治会や管理組合の会合で必ず防災について話し合うように
→2018年は、毎月防災の勉強会、防災ニュースの発行を
(これまでは不定期開催だった)
 - ⑦トイレがダメになったらどうしたらいいの
→水が流せないから便座にかぶせるビニール袋と消臭剤を自治会で購入、各戸に5セットずつ配布して参考にしてもらいましょう
 - ⑧各戸で備えにくいものはどうしよう
→自治会と管理組合で相談して購入しましょう 総額300万
カセットガス発電機 カセットガスストーブ 大型工具類等
 - ⑨各所有区分の居住者の状況調べ
→個人情報保護等の観点から、居住者の世代や人数などが把握しきれない状況が続いてきた。
毎年恒例の自治会の「餅つき大会」の餅、各戸配布に併せて自治会からの各戸備蓄のお勧め等を印刷した紙片を添付。さらに民生委員の発案で、その際にできるだけ話をつないで、それぞれの不安や悩みをお聞きしたり、家族状況などを聞き取り調査する取り組みを実施した。各階ごとに、無理なく住民の実態把握を進めることができた。今後「あいさつ」などからご近所の相互理解促進が期待される。
- まとめ
防災の取り組みは、まず家族の命をつなぐことから始めましょうという呼びかけに呼応して、マンション全体が前向きに動き始めた。日本各地や、近隣のマンションからも照会が入るようになった。
(報道公開したことによる波及効果)

【課題】

- ①避難したい時の「避難所」整備がべた遅れ
- ②「起こってみないとわからない被害想定」への不安
- ③夜間の訓練には現役世代や小中学生も多く参加されたが、普段の訓練や講演会には調整がつかず参加しにくい。ライフスタイルの差が共通意識の醸成の場を設けることに困難をきたしている。
(学習塾、部活動、スポーツ少年団、仕事その他)
- ④若い親世代の「防災」への無関心



2017年(平成29年)11月28日(火曜日) 富山 新聞

四国4県沿岸部

自治体の地震対策不十分

避難所マニュアル未作成など

四国4県の沿岸部にある自治体の多くで、災害時に開設する指定避難所(一般福祉)の運営マニュアルを作成していないなど、近い将来発生が予想される南海トラフ巨大地震に備えた対策が不十分であることが、総務省四国行政評価支局の調査で明らかになった。同局は「大規模災害が起きた際、避難所で混乱が生じる可能性もある」と指摘している。

(猪股和也)

調査は4〜10月に実施。4県計95市町村のうち、巨大地震の発生で、多数の避難者が予想される沿岸部の14市を抽出し、県内では高松、東かがわ、坂出、三豊、観音寺の5市を選んだ。

避難所の運営体制などを調査する項目では、14市から抽出した一般避難所53か所のうち72にあたる38か



マンシオン内をくまなく歩いて、防災の勉強をするイトーピア高松の住民たち(8月、高松市で)

所でも運営マニュアルを作っていないことが判明。県内では5市から抽出した計15避難所のうち2避難所でしか作成していないかった。

運営マニュアルは、市町が自治会や自主防災組織とともに作る。昨年4月の熊本地震では、マニュアルがなかったため、避難所を円滑に運営できなかったケ

スもあり、国も作成を呼びかけている。

しかし坂出、観音寺両市は、各避難所のモデルとなる市レベルでの運営マニュアルも持っていないかった。

調査では「全ての指定避難所で、開設受け入れ、災害対策本部との連絡・調整に支障が出る恐れがある」と指摘されており、両市は、必要性は感じており、今年度

調査では「全ての指定避難所では、県内の抽出5市で、一般は坂出市が7409人分不足。福祉では高松、坂出、三豊3市で計1万5411人分足りなかった。観音寺、東かがわ両市は要配

中に作成する」としている。高齢者や障害者ら要配慮者が入る「福祉避難所」では、4県の抽出25か所のうち23か所が未作成だった。県内5市の抽出10か所全てで運営マニュアルがなく、一か所だけが設置運営方針を作っていた。

避難所の収容人数については、一部を抽出したものが、四国内の自治体の多くで同じような状況であることも考えられる。災害への備えを万全にしたい」としている。

「避難しない避難」試みる

高松のマンシオン 備蓄で生活

南海トラフ巨大地震などの発生時に、避難所が不足する事態を想定し、独自の試みを行っている自治会もある。

高松市浜ノ町の海岸近くに建つマンシオン「イトーピア高松」。マンシオン自治会によると、近年、周辺に別のマンシオンなどが増

え、有事の際、最寄りの避難所だけでは被災者を収容しきれない恐れがあるという。このため、マンシオンに倒壊の危険などがなければ、自宅にとまったり生活を続ける「避難しない避難」に取り組んでいる。

各家庭で食料や水などの備蓄を進め、マンシオン全

体を避難所として助け合う仕組みを構築していく考えだ。8月には住民たちが敷地内や周辺地域を見て回り、危険箇所をチェックするなどしたほか、防災勉強会も開いて意識を高めている。

防災を担当する花崎哲司副会長(59)は「避難所が機能不全に陥る可能性もある。全てを行政任せにせず、自分たちで出来ることはやっていく方が賢明だ」と話

成果物

高齢者の避難は極めて困難な地域性という地域性において
・マンションの安全性がある程度担保されているとしたら、「避難しない避難」という選択肢を可能にするためにどうすればよいかという住民アンケートの結果

付随効果 ・当マンションでは以前からペット飼育を禁じてきたが、災害時の「人畜共通感染症予防」という新たな視点が加わった。

東北地方大震災や、阪神淡路大震災を経験した住民の声を聞きながら最初は自治会ベースで動き始め、管理組合、管理会社も加わる。

築40年を迎えたイトーピア高松

高松では最初の大規模リゾートマンション 建物とともに居住者も高齢化がすすむ

立地 大釣場海岸直近 埋立地

南海トラフ地震最大規模での被害想定では、

最大震度6強 液状化危険度A 最大津波高2~3メートル

電柱の倒壊や液状化 近隣に漁港 木造家屋密集地域が近接

避難所は1500人収容予定の新番丁小学校、施設や備蓄が脆弱

発災後2時間をめどに避難所開設を目指すという行政

ドーナツ化現象から一転、近隣に15階超の高層マンションが激増

脆弱な広域避難所

そもそも避難困難

「避難しない避難」



「上を向いて歩こう」網の目のような電線やケーブルや積った電柱

避難困難⇒人に頼らない防災を目指そう 避難困難が強く予想されるならば

マンションの防災拠点化構想 孤立を見通したフェイルセーフな仕組み作り

危機管理部局
コミュニティ
自主防
女性防火クラブ
大学
政府系研究機関
との連携



管理組合でできる備え

自治会でできる備え

両隣りでできる備え

各戸でできる備え

●FCP まずは家族から
Family Continuity Plan

押し寄せる災害



グループで長品(餅)提供の備蓄食を水でわけ
高齢者でも食べられる? とても種類が豊富



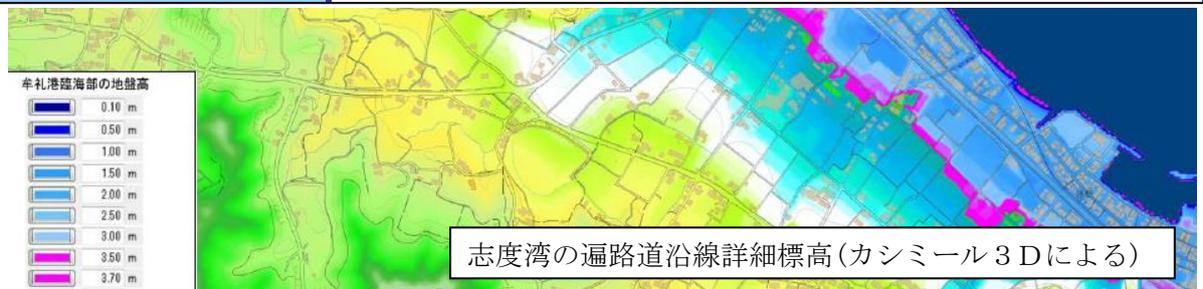
「避難所って、この辺のみんな行くの?」 歩いて・見て、風を受けて初めて分かる現実
「うっそー!? 10階のお年寄りなんて、どうすんの?」 「避難所、遠すぎるでしょ」



マンションの施設設備・周辺の環境を住民みんなで探検し、確認し、備えを考える取り組み
「電気・ガス・水道は間違いなく止まるよね。周りが火事になるかもね。津波だけでないわ。」

【実践プログラム番号：③-1】※3

タイトル	WG③アウトドアブームを受けた動き 3-1 ・防災視点の「歩き遍路」体験
実施月日（曜日）	平成29年10月28日
実施場所	道の駅 源平の里むれ～四国霊場86番札所 志度寺
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏名：香川県技術士会 谷脇準蔵 ほか 所属・役職等：技術士会代表幹事 本会副会長
所要時間または「コマ数×単位時間」	1回のみ 13時から16時30分 3時間30分
プログラムのカテゴリ、形式※4	1
活動目的※5	6
達成目標	自分たちの郷土を巡検し、遍路文化・自然や建築・文化遺産の中から、風土の自然や起こり得る災害のイメージを体験的に学ぶ。
実践方法・進め方（簡条書きまたはフロー）	①研究会の本WG責任者（香川県技術士会谷脇代表幹事）らによるコースの下見 ポイントの確認 ②香川県技術士会会員による詳細標高地形図の作成



③研究会の本WG担当者によるコースの下見



4mの津波想定 火山性の八栗を遠望 五種の火成岩の石燈籠 津波対策は施主によりまちまち

- ④WGによる当日用傾向資料の
- ⑤事務局 香川県 高松市 さ
- ⑥プレスリリース
- ⑦実施 平成29年10月28日





砂浜からわずかの高さの堤防に家屋が迫る 一方では手軽に海の幸に恵まれる
高潮や津波浸水が大いに不安な地域である  釣りの女性 この日は鯛やタナゴが大漁



冷たい風雨が迫りくる台風を予感 濡れて ここで津波来たら怖いね 香大岩原教授



クイズです 津波は何色まで来ますか？ おじいちゃんと考えてみようよ



腰板の白い部分は高潮に長く 志度寺のお接待 志度寺では十河会長から遍路の
浸かっていた名残り 冷え切った体にしみる 歴史や災害史の法話を聴く

16.5mmの降雨 雲量10 最高気温19.4度 平均風速5.7m
台風情報が朝からずっと流れ続ける1日 催行問い合わせ&欠席続出 海辺のルートでぬれた体が冷え切る お接待の温かさがしみる 若い世代の欠席率が高齢者よりはるかに高い
「災害はどんな天候でやってくるかわからないよね」体験して初めて考えたとの参加者の声



歩き遍路体験による防災教育への効果を検証した 社会実験について（報告）



- 2017.11.25（土）
- 香川県技術士会・かがわ防災技術研究会
- 代表幹事・谷脇準蔵

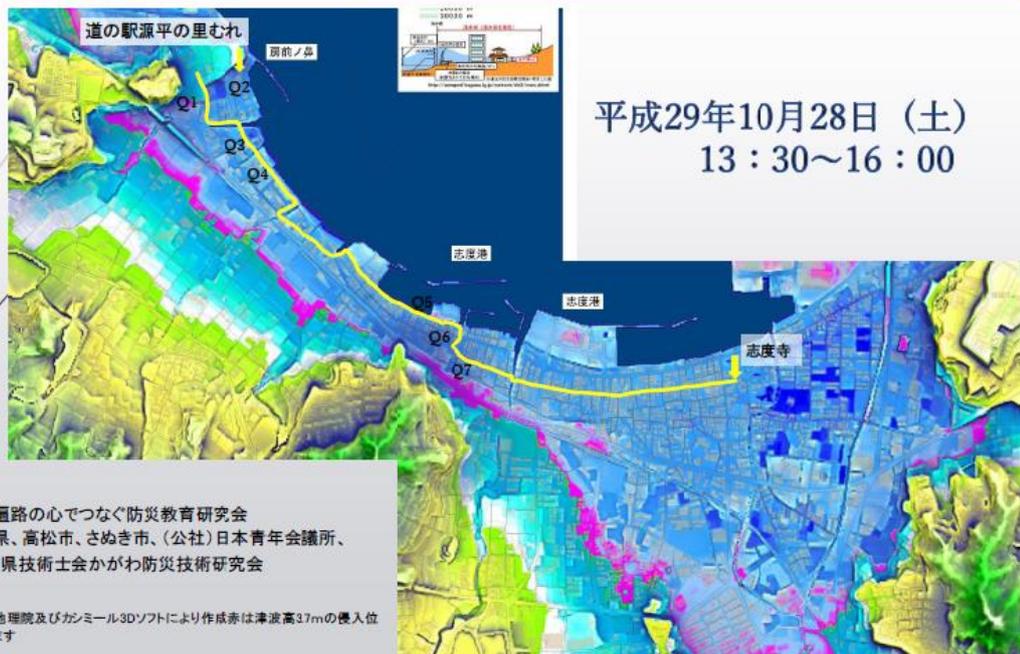
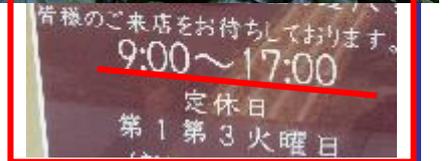
開催概要

- 参加予定者：29名
- 参加者：15名
- スタッフ：8名
- 天候：小雨
- 目的：志度湾を歩く遍路道は津波想定区域内にあることから、実際に歩きながら現地での防災に関する学習を行ってみることを試みたものであり、歴史的な街でもあることから、文化的な興味も交えながら散策することによって参加者にどのような意識の変化があるのかを社会実験として実施したものである。
- その他：アンケートを実施。

「道の駅」理想と現実の壁

防災

本駅は津波や浸水を受けない場所には自家発電装置や大型の貯水槽を設置し、を施しています。また、24時間情報提供防災機能を備え、隣接する防災公園と併



平成29年10月28日（土）
13：30～16：00

主催：四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会
後援：香川県、高松市、さぬき市、(公社)日本青年会議所、
香川県技術士会かがわ防災技術研究会

注) 図は国土地理院及びガンミール3Dソフトにより作成赤は津波高37mの侵入位置を示しています

Q1 この鳥居は何故ここに立っているのでしょうか？



- ①幡羅八幡神社の鳥居として
- ②別の神社があったから
- ③八栗寺の奉納鳥居だから

ヒント：昔の遍路道の上に立っています

Q1:③

これは八栗寺に奉納された鳥居なのです。『どうしてお寺に鳥居？』と思う人もいるでしょうが、八栗寺には本堂の横に聖天さんと呼ばれる「仏教の神様 歓喜天」が祀られています。この鳥居は聖天さんのご利益をと奉納されたものなのです。鳥居の右の柱には「弘化4年3月吉日」、左には「世話人 志度浦講中」と刻まれています。弘化4年とは1847年。今から164年前に立てられたもの。江戸時代にもお四国遍路が盛んにお参りされていきました。当時、志度から八栗寺への参拝は旧役戸遍路道という山道を通ってお参りしていたようです。

1400年続く遍路道は、自然災害などの影響で、ルートの変更が行われてきたことが分かった。

Q3 あれれ？何だか海岸堤防の高さが違うけど何故？



A3:②

平成16年の台風16号では、県下の多くの地域で既往最高潮位を更新し、広範囲に渡って高潮や波浪による浸水被害が発生しました。このことから香川県では津波・高潮対策整備推進アクションプログラム(平成18年3月)を策定し堤防の整備を進めていたところ、平成23年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」では、これまでの想定をはるかに超える巨大津波が発生し、沿岸部の市街地が広範囲にわた

「高潮」被害、「津波」被害を小さくするための工事を比べると、堤防の高さがまちまちになっている

Q6 想定津波3.7mはどの位置でしょうか？



- ①一番上(赤)
- ②中間(黄)
- ③一番下(青)

ヒント：これはヒント無しだよ～

Q6:①

地面からの高さ=3.7m-1.5m=2.2m

原地区の津波は約4mの高さが想定されています。

その高さは、ここでは赤・黄・青のどの印ぐらいになると思いますか？

ここの標高は1.5mです。えーっ、赤なんだ!! 大変だ電柱、少し傾いてるし。



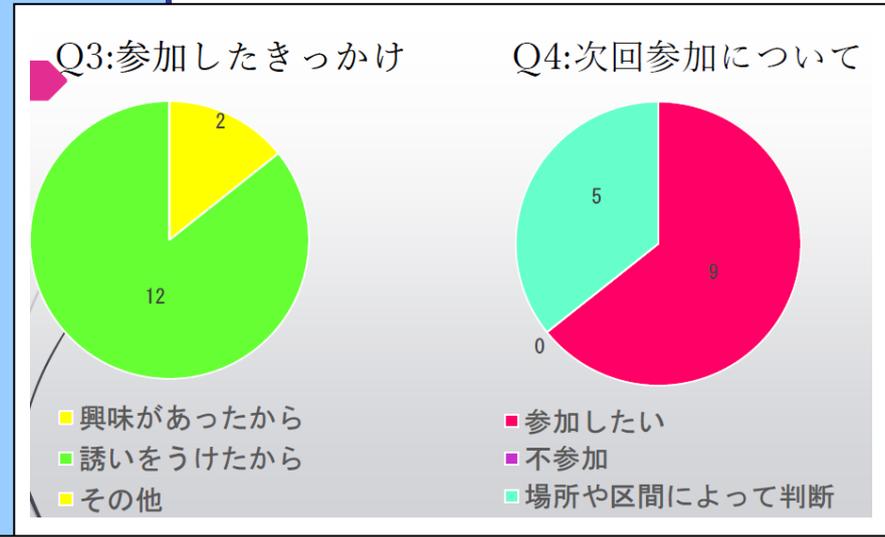
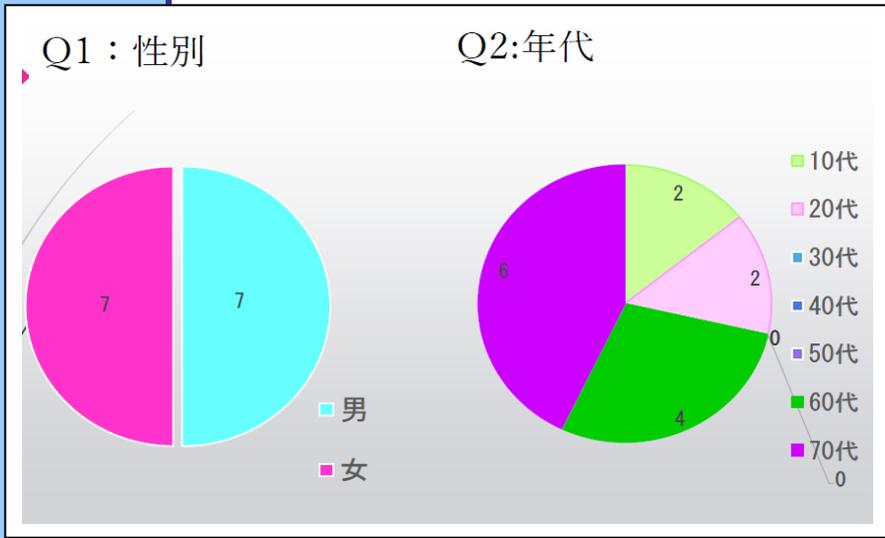
さぬき市指定文化財

この付近でとれる5種類の火成岩でできた灯籠です。板のような形のもの、いっぱい穴が開いているもの、それぞれの特徴は、どうやってできたのでしょうか。

溶岩が流れて板みたいに固まった？

岩の中の空気が出て行ったアナ？

1400万年前の四国のジオがイメージできますか？



Q5: 印象に残ったこと (自由記述)

- ① 志度の知らない街並みを知ったこと。 **海拔の意味**。志度寺の歴史。
- ② 水門が多くあり、どれも立派でした。志度寺も初めてでした。
- ③ 本堂で志度寺の歴史等を聞いたこと。お接待。
- ④ 道を歩きながらも、色々な事が勉強できるものですね、いつもつい急ぎ足でも見ないで歩いているのだなーと思いました。 **防災関係も** だけど道端の花も・・・お接待のおにぎり大変おいしかったです。ありがとうございました。
雨の中での避難が出来るのも一つのチャンスでした。
- ⑤ 初めて志度寺に来ました。雨の中、先頭さんに説明をして頂きましたが、よく判っていないです。
- ⑥ 平日頃より **防災は大切と心掛けています**。大勢で楽しみながら参加出来て良かったです。
- ⑦ 遍路を歩きながら **クイズ形式で防災を学べるという形態が良かった**です。 **遍路**と防災の関連性が再確認できました。
- ⑧ **実際に海沿いの道を歩いて堤防を見て話しを聞いたのがよかった**。色々な種類の岩が積まれた灯籠が興味深かった。
- ⑨ **色々な事を学び楽しく歩いて、心に残る一日となりました**。
- ⑩ **色々、歴史を学べて勉強になりました。防災について学べて良かったです**。



<p>準備、使用したもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人材 ・道具、材料等 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前下見 ・「道の駅」「志度寺」との行事打合せ、各種使用許可、お接待(おにぎりの炊き出しとお茶)のお願い ・関係機関 香川県 高松市 さぬき市への後援申請 ・プレスリリース ・拡声器 ・スタッフはビブス着用 ・教材を挟むクリップボードと筆記用具 ・教材 カシミール3Dによる詳細な標高図 防災クイズ ・香川大学危機管理先端教育研究センター 岩原廣彦特命教授 ・香川県技術士会メンバー(国土交通省・四国地方整備局などのOB)
<p>参加人数</p>	<p>参加予定 29名 実際の参加者 15名 スタッフ 8名</p>
<p>経費の総額・内訳概要</p>	<p>教材印刷費等 3000円 傷害保険1人100円</p>
<p>成果と課題</p>	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域と防災との関連性を知るためにフィールドに出て学習することの効果を確認できた。 ・防災学習という言葉だけでは参加者に限りがあることや参加意欲がわからないこともあり、文化や歴史なども織り込んだ形で催行することで参加者が増える可能性があることが分かった。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あえて天候不順の中での行事としてみた。実際の天候は「小雨程度」だったが、事前申し込みのあった方のキャンセルのほとんどが20歳から40歳の世代に集中した。「テレビで台風が…」が理由。 <p>●分析</p> <p>インフラの整備により、台風や河川氾濫などの被災経験が少ない世代は、朝早くからテレビでくりかえされる「台風が接近しています、十分な備えをしてください」というアナウンスに、必要以上に大きく影響されたようだ。</p> <p>次に多かった欠席の理由は、「ほかの行事が雨で中止になったから」という理由であった。</p> <p>もし災害予測の報道に予想違いが生じていたらという疑いをもたない、考えない人が意外に多かった。</p> <p>一方、防災を学ぶ大学生や、50歳以上の世代は、自分の参加決定について「天気図を見た」「台風の勢力や進路、気圧を調べて、午後からの天候の状態を考えた」「雲の厚さや雲量を観察して、経験的に大雨にはならないと判断した」など、多様な方向から状況判断をしたことがうかがえた。</p> <p>結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若い大人には、十分な防災情報リテラシーの能力が希薄である。それが追従性バイアスを高めているものと思われる。 ・経験や自然科学の学習が豊富な世代は、多様な視点からの判断ができています。これは今後の防災教育の推進において、重要な課題と考える。
<p>成果物</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カシミール3Dを用いて作成された詳細な標高図 ・巡検のまとめ 水門の取り扱い 防潮堤の積み高の違い資料等(実施地域における住民向け防災教育にそのまま使用することができた) →高松市牟礼地区社会福祉協議会研修会(2017.11) →原クリーンハイツ自治会研修会(2018.4.1 予定)


【実践プログラム番号：③-2】 ※3

タイトル	WG③アウトドアブームを受けた動き 3-2 ・お遍路ブーム 普段使いの軽ワゴンキャンピングカーを災害時に
実施月日（曜日）	平成29年11月25日(土)
実施場所	①柴田さん宅(香川県高松市生島町) ②サンポート高松デックスガレリア(香川県高松市サンポート)
担当者または講師	担当者・講師等の区分：実地調査と分析 氏 名：事務局 花崎哲司 岩原廣彦香川大学特命教授 所属・役職等：四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会役員
所要時間または「コマ数×単位時間」	①柴田さん宅における研究調査 2時間 ②防災フェスへの展示 10:30-14:30 6時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 2
活動目的※5	9
達成目標	地方の農家では一人一台のワゴン車が当たり前の時代。その軽ワゴン車を普段使いにしながら、災害時には早期避難・避難シェルターに転用できるよという啓もうを図り、高齢者が分散居住する地区の災害時孤立や、避難所生活の困難さの緩和を図る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>①軽ワゴン車を自分で改造し、毎年2ヶ月近く車内で寝泊まりをしながら国内旅行をしている「柴田さん兄弟」からの話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いざという時、私たち年寄りも、自由に改装した車で、食糧や水が確保できる安全なところに早めに避難します。 ・私たちは普段からお遍路さんに果物や飲み物の「お接待・おもてなし」をしているから、全国にお友だちがいます。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>お遍路さんにビワ食べて貰うのよ</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>俺たち自給自足できるよ</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>毛布積んだらすぐ出発や</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>収納やテーブル、虫よけカーテンも</p> </div> </div>



②四国遍路が始まって1200年と言われ、その巡礼スタイルもさまざまである。軽自動車の「お遍路カー」が爆発的に売れる今、歩き遍路・自転車・バイク・自家用車・タクシー、観光バス、鉄道、航空機で空から参拝も。

そんな時代だから売れているもの
軽ワゴン車を改造した

「軽キャンパー」に注目した。

ふだんは 買い物や病院通いに

災害時は 早期に安全な場所に

避難時は 過酷な避難所生活を補完

田舎では一人一台の軽自動車が、「災害時シェルター」に転用できる。



キャンピングカー制作販売会社に、研究協力を打診 岡モータース



株式会社 岡モータース JRYA 軽四キャンピングカー
 〒761-8058 香川県高松市勅使町630
 TEL.087-865-5588 FAX.087-865-5599
 ■ 通常営業時間：AM10:00～PM7:00 ■ 定休日：水曜日
 ■ メールでのお問い合わせ oka@okamotors.co.jp

GOOD DESIGN AWARD
2016年度受賞

Miniature Cruise
ミニチュアクルーズ

ベース車両込み
新車価格 **165万円** (税別)

岡モータース 検索 <http://www.okamotors.co.jp>



ふだん使いの車を災害時シェルターにという提案



軽ワゴンの車体が大型化し、車内では大人2人が楽に横になれるスペースがある。収納やカーテン、オプションで屋根上にソーラーパネル、電子レンジやテレビ、水タンクによるミニシンクも装備できる。畳敷きや低反発マットレス仕様も。価格が手ごろで、災害関連死の減少に期待されるのではないか。

さらに、防災フェス in サンポート高松に出展の依頼を。マスコミも防災番組の中で取り上げるなど、大注目になった。



朝日新聞 DIGITAL

トップニュース スポーツ カルチャー 特集・連載 オピニオン

新着 社会 政治 経済・マネー 国際 テック&サイエンス 環境・エネルギー 地域 朝デジスペシ

朝日新聞デジタル > 記事

香川) 避難に役立つ軽キャンピング車など 高松で防災フェス

2017年11月26日03時00分

シェア ツイート ブックマーク メール 印刷

県内の企業・団体や個人でつくる「四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会」が25日、サンポート高松で防災フェスを開いた。内閣府の防災教育チャレンジプランに採択された研究会の活動報告のほか、災害時の避難生活にも役立つベッド付きの軽キャンピングカーの展示などがあった。

研究会は、四国遍路のもつ自然に向き合う力やお接待の心を防災に生かそうと昨年設立された。フェスでは、86番札所志度寺(さぬき市)への遍路道を歩きながら、いま地震が起きたらどう行動するべきかクイズ形式で学んだ10月の活動などについて報告があった。

研究会事務局の花崎哲司さん(59)は「香川で大きな災害はないと思っている人も多いが、歴史を見ればそうでもない。もしもの時に自分の命を守る知識と行動力を身につけてもらいたい」と話した。

車内で寝泊まりもできる軽キャンピングカーを見学する来場者＝高松市

三重県信濃町で家族連れが防災用伝言ダイヤルを試験する様子＝高松市



写真中央 フランス製のキャンピングカー

- ・けん引免許不要
- ・自動車税、固定資産税不要
- ・車内で5人がゆっくり横になれる
- ・三口のガスレンジ(カセットボンベ仕様)
- ・シャワー、トイレ、冷蔵庫、エアコン装備
- ・収納が広い
- ・水回りはタンク式
- ・価格は200万円台から 見学者が多数

フランス製キャンピングカーの展示

- ・アメリカンタイプは、キャンプ場に入って水回りや電気のケーブルなどを接続するので、日本の災害時には向かない。
- ・ヨーロッパスタイルのキャンピングカーは、自車に上水や下水のタンクを実装するタイプで、災害時向きではないか。

瀬戸内海放送の取材から フランス製のキャンピングカー



12/5 「今年最後の防災事典」 「災害への備えが香川では 50%以下の項目ばかり、岡山はさらに低い」 キャンピングカーをシェルターにという取り組みを取材しました。



香大・危機管理先端教育研究センター岩原廣彦教授 「普段の生活に近く、ストレスなくよりよい環境で生活できる『基地』になる。」 リポーター「とても快適です。」



大人5人がゆっくりすごせる広さと設備。販売店担当者「香川ではまだまだ。普段は遊びに、災害時はシェルターとして利用できるのではないか」 給排水はヨーロッパはタンク式が主流。居住性の良いリビング トイレ・シャワー キッチン冷蔵庫&収納も充実。





準備、使用したもの <ul style="list-style-type: none"> ・ 人材 ・ 道具、材料等 	柴田さん兄弟(個人)とのミニキャンパーやお接待についての交流 青年会議所香川ブロック協議会担当者との役割分担 (公財) 高松観光コンベンション・ビューローとの共催関係締結 シンボルタワー開発㈱との協力関係の締結 岡モータース㈱との協力関係の締結 事前告知用チラシ、当日配布用パンフ 1000 部の製作
参加人数	サンポート高松来場者 約 1000 名を見込み
経費の総額・内訳概要	印刷費 15000 円
成果と課題	<p>【成果】 キャンピングカーの展示により、遊び心のある防災の学びの場が提供された。 ・ 屋外レジャーのためのキャンピングカーにブームが再来し、その居住性の良さや装備の充実には目を見張るものがある。レジャーにお金をかけるのはいとわない方が多いが、防災にというとならば財布のひもが固く成る方が多い。 ・ 軽キャンパーにおいては、普段使いの「足替わり」としての軽自動車、早期避難につながり、避難時のシェルターにも使えるよという発想が社会に広く発信できた。</p> <p>【課題】 ・ 軽キャンパーは比較的安価であるとはいえ、車一台の購入につながるので経済的負担が小さいとは言いきれない。キャンピングカーというよりは、日常の移動手段をメインとしながら、買い替え時に購入を意識してもらい、あるいはこの事例を参考にして自車を改装するなど、防災・減災につながるアクションにつなげてもらいたい。</p>
成果物	朝日・読売・毎日新聞、瀬戸内海放送、ケーブルメディア四国など報道各社による報道による波及効果

【実践プログラム番号：④_____】※3

タイトル	WG④女性目線での通路小屋の整備
実施月日（曜日）	2016年度から継続中
実施場所	2016(香川県高松市生島町) 2017(香川県さぬき市志度)
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：藤井 容子 所属・役職等：香川大学工学部安全システム建設工学科助教 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構助教 四国通路の心でつなぐ防災教育研究会副会長
所要時間または「コマ数×単位時間」	随時 適宜
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 2

2016年度

香川県 五色台(ごしきだい)山中の通路道沿いの空き家を女性専用通路小屋に改装して提供。工学部の女子学生たちが絵コンテを作成し、女性ならではの視点で、防犯や災害対策、洗濯物の干し場や竹筒などの自然素材を用いた間接照明など、快適な居住空間づくりに取り組んだ。寝床の幅は最低70センチと決め、これは国鉄時代からの寝台特急B寝台の幅を参考とした。また、隣の人とのパーティションは、「避難所」でよく見かける段ボール製の壁を作ったのでは、南国ならではの夏の猛暑や、隣人とのコミュニケーションに支障をきたすため、遮蔽壁は頭から胸程度にしておけば睡眠の障害にならず快適に休めることなど、「香川県立盲学校」で試行した避難所作りのイメージを踏襲した。



研究の目的



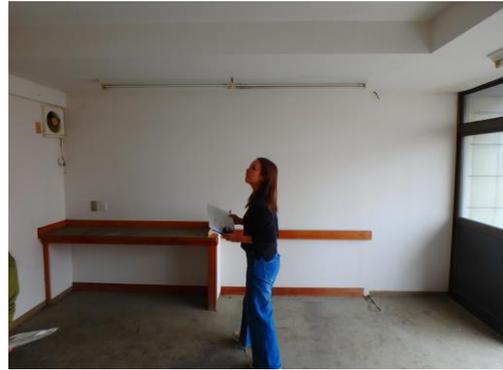
お通路さんの安全確保や地域の災害対応力の向上と活性化の可能性を検証する

山中の廃屋が、竹のインテリアなどで和テイストの快適な空間に変身。災害時はシェルターに転用も。

工学部で建築工学を専攻する学生の卒論テーマにも。



2017年度改装中の不動産物件 香川県さぬき市志度



JR 高德線志度駅直近
国道 11 号線沿い
空き店舗
津波浸水域

10版 2017年(平成29年)9月21日(木)

外国人憩う遍路宿を

志度寺・香大生空き店舗活用

歩き遍路をする外国人向けの遍路宿をつくるプロジェクトを、86番札所・志度寺(さぬき市)と香川大の学生が進めている。スペインの世界遺産「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」の巡礼者へのアンケートや、巡礼宿の調査も実施した。それらを参考に、JR志度駅近くの空き店舗を改修して今秋オープンする予定だ。

発案者は、志度寺副住職の十河瑞彦(みづの)さん(40)。寺をお参りした外国人の歩き遍路の「野宿できる場所は少ない」とよく聞かれるが、境内は防犯上の理由などから勧められず困っていた。お遍路さんが使う民宿やホテルは素泊まりでも4千円以上のところ

が多く、高いと感じる外国人が多いことが背景にあるという。四国八十八ヶ所霊場会の青年部会長も務める十河さんは、四国霊場が世界遺産登録をめざすなか、遍路宿の数を増やす必要を感じてきた。そこで寺が所有する



サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路でアンケートを依頼する伊藤さん

スペイン巡礼路で調査も



アルベルゲの室内=いずれも伊藤さん提供

改修の設計を担うのは、香川大工学部4年の伊藤萌子さん(22)。昨年度、高松市内で女性専用の遍路宿をつくるプロジェクトに参加した藤井容子助教の研究室に所属し、卒業研究として取り組んでいる。昨年度の活動を知った十河さんが藤井助教に連絡を取り、コラボが決まった。

年間二十数万人が巡礼するとされるサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路を参考にしようとして、伊藤さんを含めた学生3人と十河さんは8月初旬、スペインに調査に出かけた。巡礼路に沿って数か所の集落にアルベルゲと呼ばれる巡礼宿がある。1千円前後で泊まれるのが特徴だという。

伊藤さんらは巡礼路を25ほど歩き、終点で巡礼者約130人を対象にアンケートを実施。高齢者が多い四国遍路と違って、20代が一番多く、目的に観光を挙げる人も多かった。大多数がアルベルゲに宿泊し、宿を選ぶ際は立地条件や宿泊料金、清潔感を重視する傾向が強いことがわかった。

実際に計6カ所のアルベルゲに宿泊したり、見学したりもした。伊藤さんは「小さくてもきれいで、男女一緒に大部屋でも気にならなかった。宿の近くに飲食店もそろって、気軽に泊まったり、食べられたりするシステムが作られたら、人が来やすくなると思う」と話す。

手がける遍路宿は、男女別室で、シャワーのほかアルベルゲにもあった同宿者と交流できるスペースを設けたいという。洗濯機などの使用料として実費を取る可能性も、11月までの秋の遍路シーズンに間に合うよう完成させたいという。

愛媛県西条市出身の伊藤さんは「お寺の人と協力して後に残るものをつくれる機会がめったにない。地元四国に来る人を増やすのに私も協力できたい」。十河さんは「地方の大きな問題である空き家を、遍路という四国の文化を生かして解決できればと思う」と話している。プロジェクトに若い人が参加してくれてうれしいと話している。(多知川節子)



	<ul style="list-style-type: none"> ・担当者がスペインに渡り、「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」の巡礼の旅の様子や提供されている施設を視察。 ・視察結果をもとに、わが国におけるインバウンドのゲストの「歩き遍路」を支援できる施設設備の整備を検討。 ・2018.01 現在、完成を目指してプロジェクトを継続中である。
準備、使用したもの <ul style="list-style-type: none"> ・人材 ・道具、材料等 	<ul style="list-style-type: none"> ・本県内における外国人旅行者の実態データ収集 国籍ごとの来県者数最新データ等 協力 (公財)高松観光コンベンション・ビューロー 香川県交流推進部国際観光推進室 ・スペイン巡礼の実態調査 ・提供される空き家探し ・提供される建材・資材集め ・施工への協力者探し
参加人数	本研究会 十河陽之助会長 (四国霊場86番札所志度寺副住職) 藤井容子副会長 (香川大学工学部助教・香川大学危機管理先端教育研究センター研究員) 藤井研究室在籍の工学部学生
経費の総額・内訳概要	自己負担(旅費等) 寄付(実証に係る建物、建築資材の提供等)
成果と課題	【成果】 ・我が国における安心・安全な旅を提供するために、ハード面整備において必要な最低限の仕組みがイメージできた。 【課題】 ・普段は旅行者への簡便な宿として寝泊まりが提供できるとしても、我が国に特徴的な「地震・津波」「台風」などの災害時の当該施設への誘導や、緊急対応のインフォメーションの在り方が課題である。 ・施設設備の日常的な管理をだれがどのような形で行うべきかが検討中である。
成果物	2月中旬完成をめどに現在進行中 現場の公開・運用開始と、研究報告をまとめ、プレス発表をする予定。

【実践プログラム番号：⑤_____】※3

タイトル	WG⑤防災フェス in サンポート高松
実施月日（曜日）	平成29年11月25日(土)
実施場所	サンポート高松デックスガレリア
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名： 関係各団体から 所属・役職等：
所要時間または「コマ数×単位時間」	単発行事 10:30～13:10 2時間40分
プログラムのカテゴリ、形式	1
活動目的※5	1
達成目標	民間主導、だれもが楽しく学べるオープンな総合防災イベント開催 ★ここが新しい視点です★ ・防災イベントは、行政は危機管理部局のかかわりが大きかったが、「香川県交流推進部国際観光推進室」等、他部局との連携拡大を図り、防災意識の一般化を推進しようとした。 ・防災クイズラリー、衛星電話や災害用伝言ダイヤル、キャンピングカーの災害時利用など新しい視点で啓もうを図った。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	実施内容の策定（各種体験を中心に） ・防災クイズ……香川県技術士会 ・水消火器体験……高松市北消防署 ・防災講演会……各団体 ・防災よろず相談……当研究会 学術特別顧問 岩原廣彦 ・災害用伝言ダイヤル171メッセージコンテスト ……西日本電信電話株式会社香川支店 ・新型の171メッセージ体験機 ・衛星回線による災害時特設電話の体験 ……F T西日本 ・災害時に避難シェルターとなる「キャンピングカー」実車体験 ……岡モータース(株) 実施担当者・組織の決定 ・運営進行 日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会 平行して 会場借り上げの手続き シンボルタワー開発(株) 共催申請(公財)高松観光コンベンション・ビューロー 後援申請 香川県 ……危機管理総局危機管理課 高松市 ……総務局危機管理課 協賛団体との調整 日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会 岡モータース(株) アルファー食品(株) 西村ジョイ(株) 講師派遣申請 水消火器手配(20本) 高松市北消防署



配布資料
1 ページ



防災フェス in サンポート高松

会場 サンポート高松 デックスガレリア・多目的広場

平成29年 11月 25日 土曜日 10時30分～15時10分まで

協賛各社からのプレゼントが多数あります。ご家族みなさんでお出かけください。

2017年度内閣府「防災教育チャレンジプラン」の支援を頂いております。



道路を歩いて安全性を検証



女性目線で作った避難小屋



四国遍路の心でつなぐ
防災教育研究会
会長 十河陽之助



学術特別顧問
香川大学危機管理先端教育研究センター
副センター長 特命教授 岩原廣彦



高齢者の防災



マンション防災



早期避難や避難生活に備える車両

主催 四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会

共催 公益財団法人高松観光コンベンション・ビューロー

後援 香川県 高松市 公益社団法人日本技術士会四国本部

ステージイベント 講演等

- マンション防災
- 女性避難小屋 (災害時シェルター)
- 外国人旅行者に伝える防災
- 高齢者の防災
- 災害用伝言ダイヤル 171 メッセージコンテスト

体験

- 避難に便利な車両展示
- 災害用伝言ダイヤル
- 水消火器体験
- 防災クイズ大会
- 171 体験コーナー
- 衛星電話体験 その他



災害伝言用ダイヤル体験機に子どもたち興味津々



衛星通信回線も





私たちは、大人も子どもも、楽しく学べる「防災」の仕組みづくりを目指しています。



おへんろちゃん ステージ参観、各種体験に3つ以上ご参加いただくと、記念品をプレゼント
スタンプカードに、各ブースでスタンプを押してもらい、受付にお持ちください

- 車両展示 毎日の暮らしに、楽しいキャンプに、災害避難時に 10:30~15:00
- 災害用伝言ダイヤル171体験コーナー 10:30~14:40
- よろず防災相談 専門家による分かりやすい防災の取り組み方 10:30~14:40
- 科学体験ショー 避難荷物の重さ体験 避難の備え展示 随時
- 水消火器体験コーナー (会場 多目的広場) 11:00~ 14:30~ の2回
- 防災クイズ 12:00~ 13:45~ の2回 (会場 多目的広場)

配布資料
2ページ

ステージ行事 プログラムは臨時に変更されることがあります。あらかじめご了承ください。

10:30-	開会あいさつ 顧問 武山正人 (公益社団法人 日本技術士会四国本部特別顧問)
10:35-	事務局 花崎哲司 「防災教育チャレンジプランの取り組み」
10:50-	副会長 谷脇準蔵 「歩き遍路体験による防災学習」
11:30-	公益社団法人 日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会 上村一郎 「防災・減災に対する青年会議所の取り組み」
11:45-	香川大学危機管理先端教育研究センター副センター長 特命教授 岩原廣彦 「我が家の防災について～自分の命は自分で守ろう～」 -お客様との対話方式で進めます-
13:00-	NTT西日本 宮崎俊二 「防災に向けたNTT西日本の取り組み」
13:30-	(株)岡モータース 寺岡龍哉 「アウトドアブームと防災」
13:30-	香川県観光協会事務局次長 香川県観光振興課国際観光推進室室長補佐 山口幹太 「香川のインバウンドの現状」
13:45-	事務局 花崎哲司 「香川県の国際化に対応した防災教育の推進」
14:00-	171 災害用伝言ダイヤルメッセージコンテスト 優秀作品の発表 表彰と各賞の授与
14:40-	講評と指導 「四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会」 学術特別顧問 香川大学危機管理先端教育研究センター副センター長 特命教授 岩原廣彦
15:00-10	閉会ごあいさつ「四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会」 会長 十河陽之助

ご協賛 公益社団法人 日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会
 公益社団法人 香川県観光協会 西日本電信電話株式会社香川支店
 (株)岡モータース 香川県技術士会 かがわ防災技術研究会
 香川県防災士会 アルファア食品(株) (株)西村ジョイ

西日本最大級のキャンピングカー展示場

展示総台数 **50台 OVER**

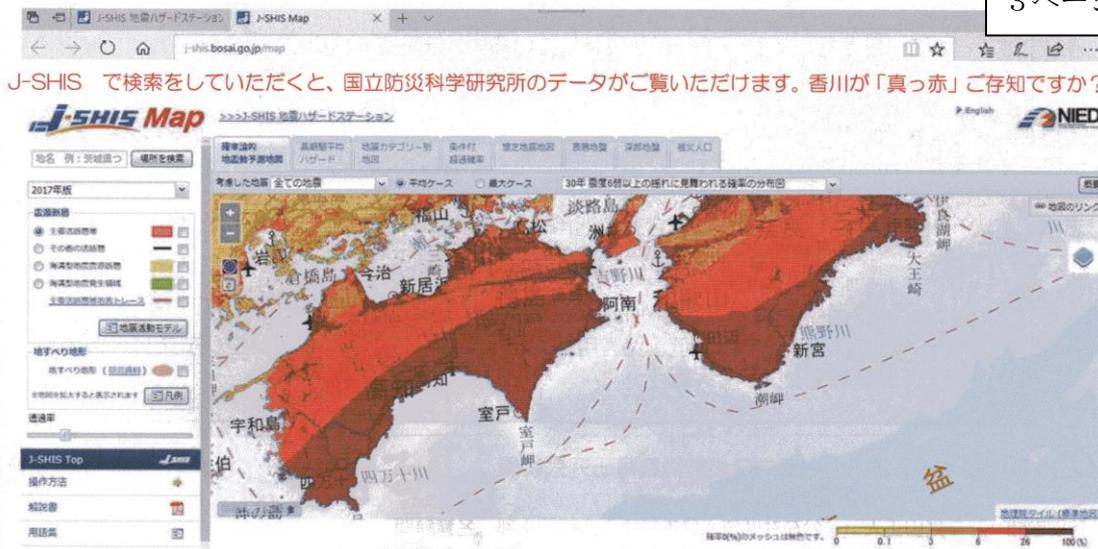
株式会社 岡モータース JVA 軽自動車 キャンピングカー
 〒761-8058 香川県高松市勅使町630
 TEL.087-865-5588 FAX.087-865-5599
 ■ 通常営業時間: AM10:00~PM7:00 ■ 定休日: 水曜日
 ■ メールでのお問い合わせ oka@okamotors.co.jp

GOOD DESIGN AWARD 2016年度受賞
 Miniature Cruise ミニチュアクルーズ
 ベース車同込み **165万円** (税別)
 新車価格
 岡モータース 株式会社 <http://www.okamotors.co.jp>



講演会は2会場で NTT西日本 青年会議所 香大 岩原先生のよろず防災相談

配布資料
3 ページ



私たちの研究の取り組みをご理解ください

歳とれば 誰でもみんな 障がい者

年齢を重ねれば、見えにくくなる、聞こえにくくなる、動きにくくなる…20年後の四国は、人口の約40%が「高齢者」になります。

南海トラフ地震だけでなく、東南海トラフ地震も危惧されている今、もしもの時には行政頼みにしない、自分たちの命は自分たちで守れる知識と行動力を、身に付けて行こうではないですか。

2017年度「四国遍路の心でつなく防災教育研究会」では、内閣府「防災教育チャレンジプラン」の採択を受けて、いろいろな立場の人たちが集い、コンソーシアムとして互いに得意な分野を生かしながら、5つのWGを核にして、研究を推進しています。

- 高松空港が国際線4路線に拡大 外国からのゲストの伸び率は全国一の宿泊者数35万8360人泊 また、県下の外国人労働者も大幅に増加
- ①インバウンドのゲスト、在留外国人向け防災パンフの母国語化。特に、英・中・韓以外の充実を図る
成果 香川県観光協会・コンビニ事業者などとの協力関係を締結。ベトナム・ミャンマー・インドネシア等からの観光客や在留労働者への情報提供の仕方を研究中。
成果物は、ホテルや旅館、事業所に置いていただき、成果を検証する予定。
- 空洞化してきた都心部が一転、高層マンション増加により、避難所が機能しにくい状態に
- ②急増する高層マンションにおける防災対策の実践研究
成果 イトーピア高松(410戸)自治会が、防災講演会、夜間防災訓練、巨大な災害発生時の選択肢の一つとして「避難しない避難」のために「マンション探検隊」を実施。防災意識が著しく向上。全国各地からの照会が相次いでいる。
※NHK「おはよう日本」で放送、読売新聞既報
- アウトドアライフが、災害時の生活を乗り切る知恵と体験につながるだろうか
- ③アウトドアブームを受けた動き
遍路道歩き体験
四国霊場85番札所八栗寺～86番札所志度寺までの遍路道の海岸部の災害上の特性を歩いて検証。



防災クイズラリーは香川県技術士会が実施 参加スタンプ3個で備蓄米プレゼント



遍路道の1200年の歴史の中から、自然災害に向き合ったお遍路さんの知恵、「お接待」で「おもてなし」をしてきたさぬきの風土を、実際に牟礼から志度までの遍路道を歩いて検証した。

「お遍路カー(軽四キャンピングカー)」への着目

香川では、一人に一台と言ってもいいほど車が普及している中、普段使いの車が、災害時の過酷な避難所生活に代わる役目を果たせないだろうかという発想。特に高齢者にとって、避難生活は過酷なはず。

配布資料

4 ページ

●空き家対策、インバウンドのゲストへの「おもてなし」、そして「災害時シェルター」として

- ④外国人のお遍路さんも増加
女性目線での遍路小屋の製作・インバウンドゲストへの開放
志度駅周辺 少子高齢化で増え続ける空き家の活用の一策にも

●楽しく学べる防災を目指した取り組み

- ⑤防災フェス in サンポート高松
講演 防災相談 防災グッズ 車両展示 災害用伝言ダイヤル17171メッセージコンテスト ほか
サンポート高松デッキスガレリアで実施

2017 年度 四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会役員

特別顧問	武山正人	公益社団法人日本技術士会四国本部 名誉顧問
学術特別顧問	岩原廣彦	香川大学危機管理先端教育研究センター副センター長
会長	十河陽之助	一般社団法人四国霊場第86番札所志度寺副住職
副会長	谷脇準蔵	香川県技術士会・かがわ防災技術研究会代表幹事
副会長	藤井容子	香川大学工学部助教(併任)
事務局	花崎哲司	日本安全教育学会会員 香川県立盲学校教諭 兵庫県立舞子高等学校非常勤講師(環境防災科)
上席研究員	為広憲幸	2016 年度 公益社団法人日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会会長
	丹生茂希	2016 年度 公益社団法人日本青年会議所四国地区香川ブロック地域防災委員長会長
研究員	丹生兼嗣	2017 年度 公益社団法人日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会会長
	上村一郎	2017 年度 公益社団法人日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会
	九雷 翔	2017 年度 公益社団法人日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会運営専務



外国からのお遍路さん 牟礼町 2017.11.04

防災一ロメモ ご存知ですか？ 香川の災害史
「香川は安心して住める。香川には大きな災害は来ないから」…本当に大きな災害は心配ないのでしょうか。
先年の県内各地での土砂崩れや高潮の被害、地球全体から見ればほんの些細なことですが。
宝永4年(1707)10月、南海道(和歌山沖)で発生した「宝永地震」では、富士山が噴火。香川では高松城下に6尺(約2メートル)の津波が押し寄せ、甚大な被害が記録されています。津波は1メートルで致死率100%(内閣府)

当研究会の名称は、特定の宗教を支持するものではなく、「四国遍路」という文化の中にある「自然に向き合う力」「お接待による助け合いの心」を、迫りくる巨大災害へのレジリエンスを高めるために生かす研究をしようとするものです。

【研究会へのご参加のご案内】

2017 年度から、全国からの個人会員の受付も始めました。本会の趣旨にご賛同くださり、防災への志を強くおもちの皆さんのご登録(会費無料)をお願いします。イベント案内・メルマガなどを、メールにて差し上げます。個人情報、本会で確実かつ適切に運用いたします。

★お問合せ 四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会事務局
107@d3.dion.ne.jp 電話 070-5514-3755 花崎哲司



高松北消防署のご指導で水消火器体験 大人も子どもも真剣に 意外に使いやすいとの感想

毎日新聞

防災フェス

体験し災害に備え 高松で企画展、500人が参加 / 香川

毎日新聞 2017年11月26日 地方版



災害用伝言ダイヤルのデモ機を体験する参加者=高松市サンポートで、小川和久撮影

地震や津波など大災害に備え、家族の命を守るための企画展「防災フェス in サンポート高松」が25日、高松市サンポートであった。県、民間企業の講演や防災に関するクイズイベントなどを通じて、参加者約500人が楽しみながら防災意識を高めた。

お濠路文化の中で育まれてきた、助け合いの精神を防災に生かす啓発活動に取り組む団体「四国濠路の心でつなく防災教育研究会」が主催した。

会場には、災害時に回線が利用できる伝言ダイヤルのデモ機を設置。自分の声をその場で録音・再生し災害現場からメッセージを伝える体験ができる。NTT東日本・西日本が開発したもので災害時には全国で約800万件の音声データを登録できるという。災害時に避難し部屋として利用できるキャンピングカータイプのトレーラーと軽自動車も展示。参加者に景品が贈られる防災クイズスタンプラリーもにぎわった。

災害用伝言ダイヤルを体験した高松市西植田町の三木のり子さんは「実際に初めて体験することができてよかった。災害時にはスマホから利用したい」と話していた。同会事務局長の花崎哲司さんは「香川でも災害は必ず起こる。行政に頼るだけでなく、正しい知識と体験を通じて、いざというときに備えてほしい」と呼びかけた。【小川和久】

準備、使用したもの

- ・人材
- ・道具、材料等

- ・香川県技術士会、青年会議所、本研究会所属の研究者など人的な資源の準備
- ・資材運搬車両のための駐車場や、当日使用する屋内外の会場の借り上げ・申請
- ・ステージに使用する台
- ・音響機器一式
- ・配布資料(1000部)
- ・荒天時のサブ会場の手配



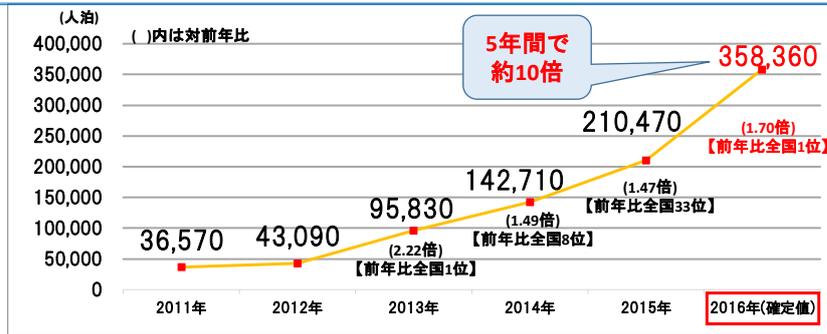
参加人数	一般 約500名 スタッフ約20名
経費の総額・内訳概要	会場費 約16万円 (高松観光コンベンションビューローにより減免措置) 印刷物 チラシ および当日配布物 約10000円
成果と課題	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光業界や普段使いの軽自動車が発災時の四国地方には役立つのではないかという提案が注目を浴び、身近に防災というものを感じてもらうことができた。 ・サンポート高松という極めてオープンな場所での開催としたため、普段ならば防災イベントにはあまり立ち寄らない、若い子育て世代の関心が集まった。災害用伝言ダイヤルを、幼児とともに体験してみる親子や、防災クイズラリーに親子で挑戦し、記念品のアルファ化米の備蓄食をもらって喜ぶ様子が見られ、幅広い世代の防災への関心の高まりに結びついた。 ・危機管理部局だけが関わる防災イベントでなく、消防局や、あらたに観光振興に係る部局との連携を図ることにより、増え続ける外国人に向けた防災教育推進へのきっかけを作ることができた。 ・防災用の食糧、キャンピングカー、ホームセンター、NTT西日本(通信事業)など、幅広い業種とのコラボレーションを実現し、企業活動が今後の防災教育に貢献できる道筋をつけることができた。 ・これまでほとんど手つかずだった観光業・旅行業・宿泊業に向けて、安心安全な旅の提供について考えてもらうきっかけとなった。 ・香川・岡山に向けたマスコミ各社の報道によって、本事業に来場できなかった方に向けても内容が広く周知され、家族の命を守るための意識の向上が図られた。 ・公的な組織の支援があったため、高松市の広報誌にもイベントが告知された。 ・「防災教育チャレンジプラン」の採択団体の事業であるということで、公的機関の理解が容易に得られて、スムーズに支援を受けることができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催時期が11月末にずれ込んでしまい、海辺に位置する会場がかなり寒く、来場者が予想をかなり下回った。 ・準備期間が、チャレンジプラン採択後に始まるため、イベント会場として人気がある場所の押さえが遅くなったのも一因である。



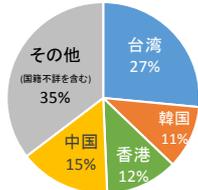


成果物

② 外国人延べ宿泊者数(香川県)

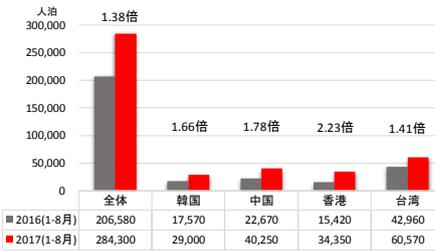


国籍別割合(2016年確定値)



出典:観光庁「宿泊旅行統計調査」
(国籍別は従業員数10人以上の施設のみ対象)

2017年(1-8月)の状況(香川県)【速報値】



2

別途資料集にて報告予定 香川県観光協会プレゼン資料から



災害用伝言ダイヤル171メッセージコンテンツ

左上 西日本電信電話株式会社
西川宏幸支店長からの表彰状授与
左下 本研究会 会長 十河陽之助
講評とご挨拶

【実践プログラム番号：⑥_____】※3

タイトル	WG⑥高齢者の防災
実施月日（曜日）	①平成 29 年 8 月 23 日 ②平成 29 年 11 月 11 日
実施場所	①高松市庵治町 高齢者教室 ②高松市牟礼町 牟礼地区社会福祉協議会 福祉委員研修会
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏 名：花崎哲司 所属・役職等：四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会事務局
所要時間または「コマ数×単位時間」	①30分 ②1時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	2
活動目的※5	3
達成目標	高齢者自ら命をつなぐためにできること 支援者がやるべきこと
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	①高齢者教室 ・香川県で想定されている南海トラフ地震、東南海トラフ地震の被害想定の確認 ・吉野川水系の中央構造線露頭部分「未知の駅みの」付近で採集した火成岩の確認 ・茨城県提供の東日本大震災後の茨城県の地震・津波被害の動画視聴 ・ほぼ同等のサイズの陶器皿とプラ皿の落下実験 割れ方と危険性 ②福祉委員研修会 ・牟礼町で想定されている地震・津波被害の報告 震度6強 液状化 津波高4メートル ・遍路道歩きで得た巡検の結果 防波堤の積み高が、高潮対策と津波対策で異なっていること 施工が農水省か国交省か、旧運輸省かで統一性がないこと 緊急避難所と指定避難所の違いの確認 高齢者・障害者への防災の啓もうの具体例について 牟礼町内をくまなく巡検した結果、急斜面地に古いため池が多く、その下方に住宅地が密集している現実の認知 山津波の危険性
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	現地で事前に撮影しておいた、危険個所の映像・画像 プロジェクター 高齢者に向けた非常食の提案 プラ皿と陶器皿
参加人数	高齢者教室 20名 福祉委員研修会 120名
経費の総額・内訳概要	実験材料費 1000円

成果と課題

【成果】

・命を守るために高齢者自身がすべきこと、支援する立場が考えておくことの一部が明確化された。

高齢者 私たちは見捨てられた どうしようもない 無気力感
高齢化した過疎地域で起こりがちな現実
高齢化率40%超 空き家が2割以上 浸水域
映像にも講話にも、反応が希薄
ところが、皿を落として割る実験では、皿の割れる音と割れた破片に非常に敏感に反応した。
日常的に経験してきたことから学んだ「身の危険」には反応が敏感になることが分かった。
高齢者の行動や思考の特性に合わせた防災教育が必要である。

福祉委員

高齢者や障害者と共に命を守るためには、自らの町の災害特性をよく知っておくことの大切さが理解された。
身近な「五色台・屋島・八栗」は全く性質の異なる火山であることが理解された。

町内各地の写真を見ながら、身近にある危険について具体的に考えることができた。

- 急斜面地の擁壁
- 倒れる可能性の高い神社の鳥居や石柱
- 堤防が強化されていない中小のため池が多いこと
- 土石流が懸念される火成岩の岩盤の上に真砂土が乗り、非常に危険な地域があることを画像で確認

支援する側に、しっかり学んでおかなければならないという機運が高まった。

福祉広報 **われ** 2018.1.1

福祉委員研修会

福祉委員会では昨年11月11日、香川県立三宮学校教諭で四国通路の心でつなぐ防災教育研究会事務局の花崎哲司先生を講師に招き、「南海トラフ地震は本当にくるのか。その時迷わない人づくり」の講習を受けました。

身体障害者だけでなく、年齢を重ねれば誰もが何らかの不便が出て、地域全体が災害時要援護者になるなど過去の資料や調査に基づくお話には説得力があり、災害時の対応を再確認しました。



東南海トラフ地震が起こったと想定すれば、太平洋ベルト地帯が壊滅的な被害を受け、GDPわずか3%の四国への支援は最後になると思つてよい。誰かが何とかしてくれる防災ではなく、自分で状況判断し考えて備え、対応行動がとれる住民が1人でも増えるように、この場からみんなが繋がるようではないですか。

香川県は、玉永地震では六尺の津波に襲われた地域であること、JISHISが発表しているハザードマップは真つ赤でも避難所運営マニュアルが不備であるなど、のどかな地方の現実がある。

※防災などの講演を各所で行ってまいりますので、お気軽に連絡下さい。
電話010-1551104-1255

安全行動と回避行動の仕方を学んでおくことと、生きる気力を培った置くことが重要である。

来年度に向けて継続

成果物

4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案と調整で苦勞した点 工夫した点</p>	<p>行政・研究者・地域住民・高齢者・マンション自治会や管理組合・行政の危機管理部局・行政の観光部局・大学の危機管理研究部門・大学の生涯学習部局・大学の国際的担当部門・社会福祉協議会・青年会議所・香川県観光連盟。香川県技術士会・関係省庁などを有機的に関連付けて、「香川県全体」の防災力の底上げを図ろうとするものである。</p> <p>巨大なコンソーシアムとしての活動を展開するにあたり、それぞれの強みや弱みを補完しあい、災害に強い地域づくりを推進していくために、立案の時点で細かく互いの事情まで踏み込んで日程や事業内容の調整をすることは極めて困難であった。</p> <p>互いに許容しあう、大きな心と破壊力が必要であった。</p> <p>「困った時はお互い様」という本研究会の理想・理念が、プランの立案段階から障壁を乗り越える困難の解消につながっていったのは興味深い。</p> <p>防災は、人を思いやる寛容さから始まることを実感した。</p>
<p>準備活動で苦勞した点 工夫した点</p>	<p>昨年度からの準備もあって、比較的スムーズに連携のための調整が進んだと思っているが、これだけ広範な取り組みを進めるには、今後、各WGごとの推進役と事務方が必要であることを痛感した。</p> <p>日程、動員する人数、安全を担保するための方策、関係機関との調整、研究や実践の構想づくり、予算措置、材料の買い出しなど、課題は次々に派生してくる。</p> <p>コンソーシアムが大きいだけに、連絡調整はメールでのやり取りが中心になり、事務局がイメージすることを組織的に共有することに非常な努力を要した。</p> <p>また、あらたな組織との関係性を締結しようとする場合、各組織ごとに次年度の年間計画がすき間なく詰め込まれていることが多く、日程調整に非常に手間取った。</p> <p>また、地方の高齢化や経済基盤の弱さが、やりたいけれど動けない、やりたいけれどお金がないなど、いろいろな場面で影響があった。</p>
<p>実践に当たって苦勞した点 工夫した点</p>	<p>「防災教育チャレンジプラン」に採択されている研究団体であるということは、行政や報道関係からの理解や協力を得やすい状況が発生した。これは非常にありがたかった。</p> <p>野外行事については、当然ながら天候の影響が大きすぎて参加者が少なくなる事態もあった。しかし、参加者からは「災害はいつ来るかわからない」「むしろ荒天であったために実感できたことが多かった」等、体験してみた者でないと理解できない、「むしろ有難かった」という声も聞かれ、これは本当の災害対応能力向上につながると感じた。</p> <p>報道による災害や事故防止のための過度な注意喚起が、自然界に向き合って生きる人間本来の五感を生かした判断を阻害している場面もあるように感じた。</p> <p>チャレンジプランからは、平田先生、林先生、中川先生、佐藤健先生、藤岡先生、国崎先生から、適宜貴重な資料のご提供やご指導がいただけたことに深く謝意を表します。疲弊する地方の防災力向上には極めて強力なご支援でした。</p>

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	香川大学 香川大学危機管理先端教育研究センター 生涯学習教育研究センター その他関係部局	知的財産の提供
保護者・ PTAの組織		
地域組織	イトーピア高松(410戸)自治会 管理組合 牟礼地区社会福祉協議会 牟礼地区社会福祉協議会庵治支所 香川県防災士会	研修や体験活動への参加 アンケート協力 広報活動
国・地方公共団体・ 公共施設	香川県 危機管理総局危機管理課 交流推進部国際観光推進室 高松市 総務部危機管理課 消防局高松北消防署 さぬき市 道の駅「源平の里むれ」 高松観光コンベンション・ビューロー	名義後援 担当職員の派遣 各種発表 資料提供 体験のための職員派遣 備品の貸し出し 駐車場等の配慮 共催関係の締結と支援
企業・ 産業関連の組合等	アルファー食品株式会社 岡モータース株式会社 シンボルタワー開発株式会社 西日本電信電話株式会社 BA香川 FT香川	サンプルの提供 車両展示 イベント用品の貸与 取組のプレゼンや体験 コーナーの運営 171 衛星通信
ボランティア団体・ NPO法人・NGO 等		
職業、職能団体・ 学術組織、学会等	防災教育チャレンジプラン実行委員会 実行委員の先生方	指導や資料のご提供

6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として 得たこと</p>	<p>災害に対する危機意識が低いとされている香川県において、住民の危機意識や対応能力を高めていくことは容易ではない。香川県立盲学校で取り組んだ「災害弱者と言わせない 香川県立盲学校のチャレンジ」は、これからますます高齢化が進行し、経済的な地盤が疲弊していくであろう四国地域、香川県における防災教育の実践に、そのまま応用できる部分が多いことが分かった。</p> <p>「歳とれば だれでもみんな 障害者」 年齢を重ねると、誰でも動きが鈍くなり、視力が落ち、耳が聞こえにくくなり、病気がちになっていく。障害者が自立し、自ら考えて行動できる人に育っていくプロセスは、そのまま高齢化が進む地方防災に応用が可能である。</p> <p>また、GDPが3%の四国経済を、常に憂慮する声が高い。新幹線が無い島も、「四国」だけである。 経済地盤がますます沈下する四国において、住民が自らの自尊感情を高めて生き抜こうとする防災・減災の取り組みは、行政の負担軽減にも大きく寄与することを実感した。</p>
<p>全体の反省・ 感想・課題</p>	<p>①コンソーシアムを形成するにあたって 香川県全域にわたる色々な組織を防災の視点から有機的に関連付けようとするコンソーシアムの組織づくりは、なかなか容易なものではない。 特に防災に関しては、「いつ来るかわからないものに投資はできない」「企業論理に反する部分がある。」と考える人たちには受け入れがたいもののようにだ。</p> <p>②大人の教育の課題 大きな災害を経験したことがほとんどない香川県の県民性は、正常性バイアス、追従性バイアスや同調性バイスに支配されていると言って過言ではない。また、江戸時代にも大変な「水飢饉」を経験しているはずなのに、たくさんの方の死者が出たとか一揆が起こった歴史がない。恐らくは江戸時代の長きにわたり、幕府に近い松平藩の保護下に置かれてきたことによるのではないかと思われる。よって、災害史も学校で語られることはほとんどない。 大人の学び、子どもに防災が語れる大人の育成が急がれる。</p> <p>③あらたな災害への学びが必要 南海トラフ地震のことばかりが叫ばれて、中央構造線由来の地震とか、あるいは二次被害として、斜面地に多数存在する「ため池」の堤防決壊の連鎖による「山津波」のイメージが希薄である。 また、都市部に急増している15階建て以上の高層マンションの住民の防災意識の向上と備えは、急を要する課題となっている。</p> <p>④本州依存の物流 四国地域の経済力の低下とともに、地元企業やスーパーの多くが、大手傘下となっている。災害時、瀬戸大橋からの流通が停まれば大変なことになるという危機感と、対応策の検討も重要である。</p> <p>⑤水対策 吉野川水系からの地下トンネル一本で繋がっている香川県の水事情がある。地震等の影響でこの水路が遮断された場合、極めて深刻な事態が起こることを想定しなければならない。</p>
<p>今後の 継続予定</p>	<p>2017年度に6つのWGとして実施してきた我々の研究実践であるが、県知事や危機管理総局長も興味を示してくださっていて、民間ベースの取り組みとして取り組みをしやすい状況下にある。 全国に先駆けて高齢化が進展し、経済力の弱い四国地方の、香川県の住民が、決して人頼みにせず、行政の責任として押し付けない防災意識をもって生きることが、今後の我が国の防災に向けての先進的な事例として提案できると確信し、強力に継続発展をしていきたい。</p>

7. 自由記述欄 ※6

※6 自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守をお願いします。

①「教えられない教員」を何とかしなくてはならない

自分が習ったことや学習指導要領に明示されていることでないと、自信をもって生徒に熱く語るができない教員が激増していると思う。教員のサラリーマン化が叫ばれて久しいが、教育委員会や学校という組織の一員として、「みんなと同じようにしていないと不安で仕方がない」教員ばかりになってきている。

クレーム社会や訴訟社会の弊害だと思うが、教育というのは教師は生徒とともに多様な考え方ができる柔軟な思考力を育てる場ではないだろうか。

特に大自然の脅威に立ち向かう「防災教育」においては、フェイルセーフな考え方で、現場をよく観察し、科学的な理論や五感から感じたことからいろいろな策を巡らせて、最善の方法を自ら発見し選択する能力が問われる。

教員自体がパニックになって硬直し、あるいは「指示がなければ動けない」というのでは、大きなハザードに直面した時に、良い結果は期待できないだろう。

②「学習指導要領」は学校のバイブルである

防災教育に前向きでない教員の多くが口にする言葉である。いろいろな教科の中で語られる防災にかかわる部分を網羅して関連付けられる指導体制を構築できるというのは理想であるが、現場の教員のほとんどがそのようなことは考えていない。自分の教科の時間数に割り当てられた内容は膨大で、それを受験体制につなげて消化していくことだけに追われているのが現実である。例えば年間4単位×35時間＝140時間といった具合に。

防災教育チャレンジプランのめざす、世界に誇れる防災教育が展開されるようになるには、防災に関する内容が、バイブルに、より明確に示されていないと、理想論だけで終わってしまう。

③防災がきちんと学校で指導されないわけ

先に述べたように、学習指導要領は、一年間の学校生活の中身を時間ごとに細かく規定しているため、それぞれの教科指導以外の側道に入ることは極めて困難である。

どの教科のどの先生も、特に受験に関係する「5教科」「主要科目」と言われる部分を担当する先生は、土石流が起こるジオラマを作って観察してみよう…とか、岩石標本を見て「どれが火山性のものかルーペで観察しよう、偏光顕微鏡で観察しよう」などという「体験的な」学習をやっている暇がないし、下手をすれば「あの先生は何やってるんだ」ということになりかねない。

④どうすれば学校教育に防災が取り込まれるかという可能性

「防災科」という教科にもっていくには、兵庫県立舞子高校や宮城県立多賀城高校のような熱い指導者がいなければ極めて困難であろうし、被災地でなければ予算化もされないだろう。最後の手段としては「二分法」によって、自分ならこの場面でどちらに動くか考えてみようということを模索する「道徳」の教材に、全国共通でもよいし地域性のある題材でよいから、「防

災ネタ」が取り上げられれば良い。例えばこの場面で、自分の命をつなぐか、人のための犠牲もいとわないか、…あるいは、他人の意見を聞いて動くか自分で考えた方に動くのか…クラスを二分して意見を戦わせるような防災教育が展開されればとても有効ではないかと考える。

今年度から初等中等教育局が防災教育にかかわるようになったのだから、「道徳」という教科に防災のイメージを組み込めばよい。これは一つの方策として有効だと考える。

⑤学校教育の「聖域」にふみこめ

さらに、学校には教科ではないが「人権・同和教育」という聖域がある。教科ではないものの、どこの教委も校長も、決してないがしるにはしない部分である。ここでは人の命や人権を大切にしよう、お互いを思いやれる人間になろう…という、社会構造の一番理想の「たてまえ」になることが熱心に研究されている。

防災教育が目指しているものは、知識・行動力・判断力に加えて「人としての生き方」という極めて重要な人間形成の部分である。

よって、「防災科」ができないならば、聖域である「道徳」や「人権・同和教育」とのコラボレーションが一番の近道であろうと提言する。

⑥我が国の将来を見通した防災教育を構築すべき

今の防災教育は、必ずプラス思考でハッピーエンドになっていないだろうか。災害の時に多くの人が流した血の涙のことは避けて教育をしていないだろうか。これだけ高齢化が進み、格差が拡大し、自己中心的な考えに走る人も多くなっているとされる中で、人の痛みが分かる人間を育てるべきだ。

⑦マスコミの悪いところ

番組の改変期になると必ずと言っていいほど「世界ビックリ映像」のような番組がオンエアされる。

バイクで突っ込んでいってトラックの下敷きになった…でも、奇跡的に軽傷だった。

ワニに太ももをがぶりとやられた…でも顔面パンチをして逃れることができた。

火事のビルから飛び降りた…奇跡的に下に停まっていたトラックの荷台がクッションで助かった。

面白おかしいナレーションで語られるこの手の番組ばかり視聴していたら、何が起こっても何とかなると思いつむ人間しか育たないだろう。

悲惨な災害や事故によって失われた命を、あるいは大きく傷ついた人たちについて、原因を検証し、災害や事故を恨み、どうしたらこんな悲しいことが繰り返されないようになるのかを考えさせることがメディア本来の使命ではないだろうか。

決して血の海やご遺体を見せろというわけではないが、興味本位な視聴率稼ぎはもはや滑稽でしかない。

⑧将来を見据えた防災教育を

福島第一原発の事故後、各社のインタビューに対して、どこの首長さんも「こんな原発災害が起こるなんて聞いていなかった。」「原子力災害への対応方法なんて聞いたこともなかった。」と声高に叫んでいたのを思い出す。それが繰り返し流され、だれの責任かと言わんばかりだっ

た。

しかし、ぼくは冷静に学校の職員室から一冊の本を取り出して、読み直してみた。

記憶違いでなければ、

学校安全参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育 H22.3 文科省

これには詳細に、原子力災害のみならず、いろいろな災害や危険に対してどう指導しておくべきかが発達段階に応じた表にまとめられている。

防災教育チャレンジプランの渡邊正樹先生や藤岡達也先生はじめ、多くの専門家がかかわられた、素晴らしい本だと思う。各校に何冊も配分されていると思うのだが、震災前にこの本は確かに全国各地に配布されていたはずなんだと思った。

大人や先生が、子どもたちの命を大切に思わない国になったら、この国に将来の希望は見いだせない。

豊かな物資のあふれる現代から、これからの貧困な超高齢化社会に向けては、国民一人一人のレジリエンスを高めた金のかからない防災教育こそが国の力を高めることにもなることを肝に銘じ、真剣に取り組まなければならないとちかう。

⑨徳島県三好市に学べ

数年前の徳島豪雪では、山奥の急斜面に点在する多くの民家が長期間の孤立を強いられた。あまりの雪に警察も自衛隊も動きが取れなくて、マスコミは「全員絶望か」なんて記事を書いていた。

むなしく時間だけが過ぎて、食糧も水も電気も電話もガスもすべてが尽きたはず、きっと大変なことになっていると言われながら救助隊が入ったのはずいぶん日が経ってのこと。ところが山の人たちは生きていた。「何かあったん?」「よう来たな」と歓迎されて、マスコミも面食らったという。豪雪地帯の山間地の人たちは、昔から保存食を蓄え、一冬分ぐらいの薪を燃料として取っておくのは「当たり前」だったということだ。徳島県三好市の「そらの郷」は、首都圏や京阪神からの修学旅行に加えて、ヨーロッパ諸国からの農山村生活体験を求めてくる人でにぎわっている中に、防災教育のプログラムを入れ込んでみたいという事務局次長がいる。こんな地域の生きる力は、本当の「体験的な防災教育」として参考にすべきだと思う。

「アリとキリギリス」の童話があるが、今や我が国は防災に関して備えの薄い、極めて楽観的な人の多い「アリギリス」の国になってはいまいか。

「キリギリス」になってしまう前にやっておくべきことは山積である。

四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会事務局 花崎哲司

香川県立盲学校教諭

兵庫県立舞子高等学校環境防災科非常勤講師

(自由記述: 3/3)

A large empty rectangular box with a blue border, intended for free text entry.

(自由記述: 2/3)



A large, empty rectangular box with a thick blue border, occupying the central portion of the page. This box is intended for the final report content.